
とある魔術の頂上戦争

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の頂上戦争

【Nコード】

N5727X

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

9月28日…上条当麻はマンホールに落ちた。そして辿りついたところはドブ臭い下水道……ではなくて、『白ひげ海賊団』の船だった。しかも、これからエースの処刑を止めるためにマリンフォードへと向かう途中の……

ブログ（前書き）

新連載です！不定期更新ですがよろしく願いします。

もし、誤字脱字、誤りがあったら、ご指摘してくださるとうれしいです。

ブローグ

9月28日

そう……その日も上条当麻は、朝から「不幸」だったと断言できた。

朝から同居人のシスターさんに頭を噛まれ（彼女の好きなアニメの録画を消してしまったからだが……）

学校へ行く途中で2回くらい車と衝突しそうになり（焦って信号無視をしたからだが……）

自販機に2000円飲み込まれたり（よく考えてみると、以前もこの自販機に飲まれた気がする……）

だが、それだけだったのなら、上条当麻の許容範囲内だっただろう。事実……彼も、この時までは「仕方ない」と諦めていた。

そう……この時まででは……

そのあと彼は、家……と言っても学生寮だが……に一応、帰宅。制服のまま夕食のしたくをしている。

「ねえ、とうま、とうま……とうまってば……」

居間で声を張り上げているのは、同居人の禁書目録インデックスという名のシスター。

『シスターさんと高校生が同居しているってどういうシチュエーション！？』

っと思うだろうし、説明がほしいに違いないが……それは上条当麻自身も言えることなので、省かせてもらう。

そう…実は、彼には夏休み上旬以前の記憶がない。何故、記憶が飛ぶような事態になったのか分からないが、とにかくにも、インデックスというシスターの少女と出会った時の記憶がないのだ。だから、どうして彼女が、この家に居候しているのか分からない。

「とうま！ねえ聞いている！？もしかして、シカトっていうやつかも！？」

「はいはい、行きますよ。なんですか？」

火を止めて上条が居間へ向かうと、インデックスは雑誌に釘付けだった。

「ねえねえ、とうま！！これ見てよ！！」

「ん？……なんだ？」

「見て分からないの？海賊の話だよ！！」

「海賊？…ああ…ワンピースね…」

めちゃくちゃ最近はやっている漫画…少しなら上条も内容を知っていた。

「あのね、この漫画って…」

「はいはい…どうせ『悪魔の実』はナンタラの魔術の応用で生み出されたもの』とか『ワンピースの正体はウンタラ錬金術の応用』みたいなことだろ？」

「…とうまゝ魔術を馬鹿にしてるでしょ…」

冷めた目をするインデックス。

「馬鹿になんてしてませんよ。……ん？」

ポケットの中の携帯が音を立てた。

「ん？…メール？」

差出人は不明…

「『上条当麻…今から下のコンビニにすぐ来られたし』？誰だこれ？……まあ、行かないと、さらに不幸になったら嫌だしな…

わりいインデックス。ちよっと出かけてくる。」

「とうま。どこか行くなら、お菓子買ってきてほしいかも。スフィックスが勝手に食べちゃって…」

見てみると爪らしきものでズタズタに引き裂かれたお菓子の袋が散在していた。

「はいはい…買ってきますよ。」

上条は外に出た。

で、コンビニの前まで来たわけだが、誰もいない…しかたないので先にインデックスの要件を済ませることにした。

「…ったく…だれもいねえな…帰るか…」

コンビニの袋を下げて歩き始める…だが……

足が地面に着かない……？

「う…うわあああああ…！！！！！！！！」

上条当麻はマンホールに落ちた…どこまでも…どこまでも深いマンホールに……

第1話：マンホールを抜けるとそこは…

…上条当麻は、マンホールの中をダイビングしていた。

背中から落ちているので、下の様子が全く見えないのが、怖い。ただ、黒い空間だけが、上条の周りにあった。

しかし、いつまでも落下しているわけがない。これはマンホール。いつかは下水道にたどり着くはずだ。

…いずれ来るであろう衝撃を予想し、思わず上条は目をつむった。

バッシャーン！！！！

ゆっくりと目を開けると、もやで視界が悪いが、一面茶色の世界だった。

…そしてこの時…上条は、はっきりしない意識の中で、妙な事に気が付いた。

自分は、どこにでもあるマンホールに落ちた。ということは、辿りつく先は底冷えするような下水のほず。

なのに、今…自分が浮かんでいるのは水…じゃなくて、ちょうどいい感じのお湯……

下水道といえば、誰もが口元を覆うドブ臭さで充滿しているはずなのに、鼻に入ってくるのは、どことなく甘い匂いだった。

それ以前に、下水道なら天井が茶色のわけがない…もっと…汚れた灰色のはずだ。

上条は、そつと立ち上がった。……幸いなことに、お湯は浅いようで、ちゃんと足の裏が地面についた。

お湯は自分のヘソの位置までしかない。

もやで視界が悪い中、ゆっくりあたりを見わたす。

見ると、悪い視界の向こうで、何人かの人影が身を寄せ合っているのが見えた。

「あゝ、すみません。ちょっと尋ねたいことが…」

ココまで口に出した時、上条はあることに気が付いた。

まず、人影が恥じらうような仕草をしているということ…

その次に、その人たち全員が、何も身にまわっていないということ…

最後にその人影が…

「「「キヤアアアアアア！！！！！」」」

全員女であつたことだ。

突然、落ちてきた人物が男であると分かつたからなのだろうか？
とにかく、突然の出来事に放心状態だつた彼女らは金切り声を上げると、桶やら石鹼やらを投げてきた。

「いや、待つてください！！すぐに出ていくんで！！」

「ナースが入浴だつて知っていて入ってくるなんて何様！？」

「恥を知らないさい！！」

「五体満足で帰れると思つたら、大間違いよ！！」

彼女らは攻撃の手を止めなかった。

むしろ、攻撃力や迫力が増している気がした。

「不幸だ！！！！」

上条は石鹼やら桶や、シャンプーやらリンスのボトルを、かわしな
がら、逃げるように風呂場から出た。

（なんで、マンホールの下に銭湯が広がっているんだ！？
いや…そんなことよりも、まずは上を目指そう！！地上へ戻らな
く
ては！！）

上条は、ひたすら走った。途中でなんか人とすれ違った気がするが、
今はそんなところではない。
ただひたすら上を目指した。

「出口か！？」

階段を上り切り、扉を開けると、確かにそこは外だった。

「……………なにこれ？」

耳に入ってくるのは波の音……………だけ……………。

そう…たどり着いたのは地上ではなく…海の上…正確に言えば、ど
こかの船の上だった。

第2話 空から落ちてきた少女

上からは眩し過ぎる太陽が肌をやく。…頬を撫でる風には潮の香りが混ざっていた。

リゾート地に早変わりできる気候の中で、上条当麻は縄で縛られていた。

周りにいるオッサンたちの気迫に負けないように、上条は精いっぱい声を張り上げる。

「さっきから言ってるじゃないですか！

マンホールを抜けたら何故か女湯で、人畜無害な上条さんは、あわてて地上に戻るため外に出たら何故か甲板で船の上だったんですって！！！」

彼に『この場から逃げる』という考えが全くなかったので、正直に本当のことを話す。

上条はいままで…といっても記憶にある限り、かなり喧嘩をしている。

元々の不幸体質のせいで武装したスキルアウトや能力者の不良の喧

嘩に頻繁に巻き込まれるため、その経験上ある程度は喧嘩慣れしており打たれ強く体力もそれなりに自信がある。

戦闘スタイルも、右手に宿る力『幻想殺し』で相手の能力を無効にしてから、近接格闘に持ち込んで直接拳を叩きこむ事を基本戦術にしている、この方法で、学園都市のNO・1の実力者を倒したことがある。

しかし、それは相手が能力に頼り切っていて、基礎的な身体能力が低いからだからだ。

つまり、目の前にいる人たちのように、筋肉が凄くて見るからに『強い』人になうわけがない。

武器でもあれば、話が変わるかもしれないが、彼が今持っているものは、菓子の入った袋だけだった。
到底、武器と言える代物ではない。

だから、正直に話して分かってもらうほかなかった。

「ホントかよい？」

「本当ですって！！」

こんないつ殺されるかどうか分からない状態で嘘がつけるわけない

じゃないですか！！

だいたい俺は『覇気』ないし『悪魔の実の能力者』じゃない、普通の『彼女いない歴〃年齢』の高校生ですよ！？恋愛フラグが一切ない人畜無害な高校生を縛り付けるって、おかしいじゃないですかー！！」

「まあ…嘘を言っているみたいには見えな…」

「でも、いきなり現れるっておかしくない？」

「でもここは、『偉大なる航路』^{グランドライン}だから、何があっても不思議でないよな。」

……

「（あれ？なんか今…ものすごい聞き覚えのある単語が……？）

あの、すみません！！いま、グランドラインって言いましたか？」

「言ったが…それがどうした？」

上条はじいじと一人一人の顔を見直した。

『偉大なる航路』というのは、漫画・ワンピースに出てくる海の名前。

こうしてじいっと見てみると、目の前にいる男たちにも見覚えがある。

…もつとも、名前が分かる人は2・3人だったが。

「ここつて、もしかして『白ひげ海賊団』ですか？」
「それを知らずに、乗り込んだのかよい？」

見事なパイナップル頭の男…白ひげ海賊団一番隊隊長のマルコが、
答える。

「だから、何度目ですか！？
俺はマンホールから急降下ダイビングして、気が付いたらここにいたって！！
つか、異世界トリップか！？なんでワンピースの世界！？
不幸だ！！！」

なんで、こんな死亡フラグが半端なさそうな世界に来てしまったの
だろうか。
今までも死にそうになったことが沢山あったが、今回は本当にここ
で死ぬかもしれない。

「異世界トリップ？よく漫画とかである？」

この船にしては珍しく平均的な体つきの男……隊長格なのは確かだ
が、上条は名前が思い出せなかった。

「はい！物わかりが良くて嬉しいです！！」

「本当か？胡散臭いな…」

「証拠はあるのか？」

「証拠？」

考え込む上条だったが、証拠なんて思いつかない。
この世界に来ようと思ってきたわけではないのだ。そんな証拠となるようなものなんて持っていない。

「ん？」

「きゃあああああ！！」

頭上から声が降ってきた。上条を囲む人たち（つまり、白ひげ海賊団の隊長たち）が上を向くので、つられて上条も上を向く。

なにかが近づいてくる…見る限り人のようだ。

「なっ！？」

上条の顔が引きつった。

なぜならその人物は……………

「うぐっ！！」

「いたたたた……………」

なんで、この私がマンホールに落ちないといけないのよ……………
？…って…ああ！！あんた！！なんでわ…私の下にいの！！？」

女はあわてて上条の上をどいた。

「うう…なんでビリビリまで……………」

これから事態が好転するとは思えない…

「不幸だ……………」

上条当麻は、ビリビリ中学生こと、学園都市のNO.3……御坂美琴をみてため息をついた。

第3話 何事も口裏合わせが大事

「なんであんたがここにいるの！？っていうか、なんでマンホールから落ちたのに、海の上！？」

「…お前もマンホールからトリップかよ……」

「な…なによ！！」

仕方ないじゃない！黒子の奴が、いきなり飛びついてきたのが悪いのよ！」

「あゝ……それで避けようとしたら落ちたってことか……」

「文句あるわけ！？」

「いや…文句というよりこの状況……なんつーの……不幸だー」

上条は真っ赤な顔で怒ったように話す美琴を見て、ため息をついた。

「不幸だつて……ん？」

美琴は周りの状況に気が付いたらしい。

じいーっつと周りにいるオッサン達の顔を見る。

「ねえ…もしかして……ここ……『モビー・ディック号』！？」

「も…モビー…？なにそれ？」

「はああ！？あんた知らないの！？」

バツかじゃない！？っという顔をする美琴。

「いい？『モビー・ディック号』っていうのは、『ワンピース』に出てくる『白ひげ海賊団』の船のことよ。」

頂上決戦の時に燃えちゃったけど、ルフィ達の『ゴーイング・メリー号』や『サウザンド・サニー号』より、はるかに大きくて……はつきり言ってるあのマンガに出てくる船の中で最大級なんじゃ……

……って、どうかしたの？」

「い……いや……よく知ってるな……って……」

ペラペラ漫画知識を披露する美琴に若干引く上条。

学園都市有数のお嬢様学校『常盤台中学』のお嬢様のイメージから、かけはなれていた。

「なによ？こんなの当たり前の知識じゃない？

アンタは読んでないの？」

「いや……少しだけならな。『アバラスト編』位までなら……」

「『アラバスタ編』ね。」

っていうか、まだそこなの！？もう本誌でルフィは、とっくに19歳になっているって言うのに。」

「あんなあ……」

「おい、なに不吉なことを言っているんだよい？」

見るとマルコが殺気を出していた。

「この船が燃える！？なに言ってるんだよい！？」
「……………」

何故か黙り込む美琴。

「おい！！なんとか言えよい！！」
「……………」

本当にブーチの・護と同じ声だ！！」

「はあ？」

「お願いだから『正解』って叫んでみて！！

または、『ペガサス・星拳』でも構わないから！！」

目をキラキラさせる美琴。

「……………おい、御坂…相手が困ってるぞ？」

「えっ？」

「そんなことよりも…ちょっとこっちに来い！」

「えっ！あ…ちょっとー！！」

マルコに『ものまね』をせがむ美琴の腕を引っ張る上条。
そのまま船の端の方まで連れて行った。

「あのなあ……つて、なんで赤くなつてんの？」

「そ……それはあんたがいきなり………」

「いきなり……なんだ？」

「ああもう！！で、なんなのよ！！」

「実はさあ……ちよつと原作知識を披露するのは止めないか？」

「？なんでよ？」

「いや……だつてさあ……気味悪いって思われるだろフツー？」

だつて、誰か不特定多数の人たちが俺たちの知らないところで俺たちの存在や行動を知っているってなんか嫌だろ？」

「そりゃ………そうね。悪かったわ。」

うなだれる美琴。なんか、罪悪感を感じる上条だった。

「ああ……それでさあ、言ったことはもうアレだから、口裏を合わせるぞ？」

「そ……そうね。」

額を合わせて話す上条と美琴。

「おい！！話はすんだのか！？

さつさと答えるよい！！」

「あ……あはは……悪い悪い。」

作り笑いを浮かべて上条は振り返った。

「俺たちはさっき言ったみたいに『異世界』から来たんだ。」
「で、異世界の奴らがなんで、この船を知ってるの？」

和服を着た人が話しかけてきた。

「じゅ…数年くらい前に、一度この世界にトリップしてきた人がいたみたいなんだよ。」

で、その人が遠くからこの船を見た時に、なんか…」

「火柱が上がってたから、燃えたように見えたんだって。『モビー・デイク号は燃えた』って伝わってたのよ。」

「数年前…火柱…ああ…エースの仕業かな？」

「あゝ…ありえるよい。」

まだ、完全に信用していない眼だったが、納得の色が見え始めた。

「でも、異世界から来たって証明できるのか？」

空島の住人ってことも考えられるだろ？」

「そ…空島？」

原作知識にない言葉が出て戸惑う上条。

「空島っていうのがどういうところか知らないけど、これを見たら

納得してくれる?」

空島を知っている美琴は、上条に合わせて空島を知らないふりをする。そして、ポケットから携帯電話を取り出した。

「これは、携帯電話って言って、いわゆる電電虫みたいなもので、遠くの人と話が出来たり、写真が取れたり、メールが出来たりするの。つていつても、今はアンテナが圏外だから通話もメールも無理だけどね。」

携帯を受け取りいじくる隊長たち。

「たしかに、この世界にはないモノだね。」

「面白いな、異世界人なんて。」

「さすが『偉大なる航路』だぜ!!」

そんな様子を見た上条と美琴は『上手くいった』と目を合わせた。どうやら、信じてくれたみたいである。

「で、どうやって帰るんだ?」

「そ…それが…肝心なところが伝わってなくて…」

このまま、白ひげ海賊団に居候させてもらえれば、衣食住の心配はなくなる。

「そうか…困ったな…早く帰ってもらわないと、危険なのに…」

「危険？」

「そうなんだ。実はこの船……」

今にも処刑されそうな仲間を救出するために、全勢力を集結させてある敵の本拠地に取り込むところなんだよ。」

しばらく固まる二人……

「なんだか分からないけど、不幸だ!!!!!!」

「ええええええ!!!!!!（今って頂上戦争の時期なの!?!）」

それぞれ違う意味で絶叫する、上条と美琴だった。

第3話 何事も口裏合わせが大事（後書き）

10 / 18
…誤字が発覚したので、一部訂正しました。

第4話 どの世でも許されないことがある

「仲間？一体誰が……って、どうしたんだよ、顔色悪いぞ？」

上条は真っ青な顔になった美琴をみて首をかしげた。

「も…もしかして、処刑されるのって…エース…？」

美琴の震える口から紡ぎだされた言葉に一同が驚いた。

「おい、嬢ちゃんは何でエースを知ってるんだ？」

「そ…それは……以前にトリップした人が、エースの母親のルージユさんがエースを出産する場面に立ち会ったから……」

「ってことは、エースの父親の事も知ってるんだな？」

美琴はうなづいた。

「私も手伝う！！エースを死なせるわけにはいかないわよ！！」

私、こう見えても元の世界でNO.3の実力者なんだから！！」

「おう！そうなのか！？助かるぜ！！」

「でもよ、そういう話は親父にとおさねえと不味いんじゃないかよ
い？」

「確かにそうだな…よし！親父の所へ……」

「待て待て待て」

上条が盛り上がっている中に割り込む。

「な…何っ…話についていけないんだけど…」

その… エースって誰？ つか、なんで処刑されそうになったわけ？」

「… あんた… アラバスタまで知ってるんじゃないの？」

「そうだけど… そんな隅から隅まで知ってるわけじゃ…」

はあ… っとため息をつく美琴。

「エースっていうのは、麦わらのルフィのお兄さんで、海賊王『ゴールド・D・ロジャー』の息子よ。」

「… ああ… あのメラメラね… ってことは、ルフィの奴も海賊王の息子なのか！？」

「いや… そうじゃないけど…」

「で、なんで処刑されそうなんだよ？」

「そ…それは…」

美琴はあさつての方向を向いた。

恐らく美琴は、なんでエースが処刑されるのかを知っているのだろうが、先程『あまり原作知識を人前で言わない』と約束していたので言うことが出来ないのだろう。

「奴の部下の“黒ひげ” ティーチが白ひげ海賊団最大の罪「仲間殺

し」を犯して逃亡したんだよい。だからエースはティーチ討伐に向かったんだよい。

だがよう、負けて海軍に引き渡されたんだよい。

海軍は海賊王の血を完全に断つため、エースの公開処刑を行うことに決めたんだよい。」

マルコが苦々しそうに説明する。

他の隊長たちも顔から怒りがにじみ出ている。

「つまり…裏切り者を倒そうとして返り討ちに合って…ん？じゃあその「黒ひげ」って奴はどうなったんだよ！？」

「ティーチは…エースの首を手土産に『王下七武海』に入りやがったんだ。」

「『王下七武海』？…どこかで聞いたことが…ああ！！思い出した。クロコダイルが入っていたやつか。」

その瞬間、上条の思考が一旦とまった。

『王下七武海』…それは簡単に言うと、政府に略奪を許可された海賊の事だ。

クロコダイルとは、その王下七武海に所属していた海賊で、アラバ

スタ王国の紛争を巻き起こした張本人。秘密犯罪会社「バロックワ
ークス」を密かに立ち上げると、ダンスパウダーを使って、アラバ
スタ国民の国王への反感を煽るなどして、国の転覆と、国に伝わる
古代兵器「ブルトン」を手に入れようとした奴だ。

最終的に、政府を凌ぐ軍事国家を築くことが目標だったらしいが、
そのために何十…何百もの人の血が流れたかは考えたくもない。そ
れも、自分の配下の血だけではなく、全く関係のない一般人の血が
ほとんどなのだ。

「ゆるさねえ……」

上条は拳を握りしめた。

インデックスが見ていたワンピースの再放送に出てきた「王下七武
海」のドンキホーテ・ドフラミンゴも脳裏に浮かんた。

彼の真の目的は分からない…だが、人身売買を行っていたのだ。一
応は手を引いたらしいが、その理由は「順調過ぎて退屈だった」か
らだ。

「ゆるさねえ……あんな葉巻鰐や、もふもふピンクの仲間になるた
めだけに、元々の仲間を殺して……海軍に引き渡したりしたら、公
開処刑が待っていることを知っていても……目的のために自分の上

司を海軍に差し出すなんて……」

ぎりぎりつと齒を食いしばる上条。
そして、じつと自分の右手を見た。

「おい、お願いだ！！俺も仲間に加えてくれ！！
俺がこの右手で、エースを処刑するっていう幻想をぶち壊してやるんだ！！」

どことなく無気力そうだった少年の雰囲気が一気に変化した。

「誰かを絶対に助けたい」という気持ちが全身からにじみ出ていた。

「って！何すんだよ、ビリビリ！！」

上条はいきなり美琴に後頭部を叩かた。

「あんたって、本当におせっかいよね。」

「そういうお前だって『手伝う』って言ってたじゃないか！！」

「そりゃあ、エースに死んでほしくないからに決まってるじゃない。
アンタより私はエースについて知ってるし。」

でも、アンタは、ほとんど今まで知らなかったんでしょ？よく毎回
見知らぬ人のために動けるわね。」

「ほっとけないだろ。仲間を利用するなんて許せないしな。」

美琴はそれを聞くと呆れたように笑った。

「なんだよ？なんか悪いかな？」

「悪くないわよ。あんたらしいって思っただけ。」

感謝しなさいよ。このLv5で学園都市No.3の超電磁砲レールガンの美琴様がアンタの味方なんだからね。このLv.0さん。」

「……馬鹿にしてるのか？」

「し……失礼ね……！」

だいたい、私はアンタに一度も勝ったことがないから、ここでアンタより先に救出して、アンタより強いことを証明してやるんだから……！」

「証明って……御坂さんのほうがはるかに強いですよー。」

この間の大覇星祭の賭けでも、お前が勝ったじゃないか。」

「そりゃそうだけど……それとこれとは違うの……！」

「……痴話げんかはそこまでにして、そろそろ親父のところへ行くよーい。」

マルコの言葉で一気に覚める2人。

……そこで二人は親父……世界最強の海賊・エドワード・ニューゲートと対面し、彼の「息子」と「娘」になる。その時、エース処刑場で……残り約6時間で……

刻一刻と船は、海軍の待ち受ける「マリンフォード」へ針路を進めていく……。

そして、同時刻……もう1つの物語が動き出していた。

……インペルダウン……

そこは、拷問室と死刑台が立ち並び、世界中で暴れ回っていた凶悪な犯罪者達でひしめき合っている大監獄であり生き地獄。

その地下6階「LEVEL 6」「無限地獄」

起こした事件が残虐の度を越えたため、政府により存在をもみ消された終身囚・死刑囚が幽閉されるフロア。超大物や伝説級の危険人物が幽閉されているため、存在は秘匿されている……

しかし、このフロアに似つかわしくない人物が突如、現れた。

「痛ったいつてミサカはミサカは打ったお尻を触ってみたり。
ってゆーか階段から落ちたはずなのに、なんでこんな所にいるんだ
ろっつてミサカはミサカは疑問を口に出してみたり。」

ワンピースを着た外見年齢10歳前後ほどの少女……ラストオーダー打ち止めが現
れたのだった。

第5話 誤解は意外と簡単に生まれやすい

……学園都市第七学区にある病院……

「ってことは、あの子はこの階段から落ちたということだね？」

カエル顔だが、腕は一流と言われている医者…ヘウンキャンセラー冥土返しが、無表情のままで階段を指差す少女に尋ねた。

「正確に言えば、トイレに行こうと走った結果、足を滑らせてここから落ちてしまった」ということですね、とミサカは説明します。」

「…で、俗に言う『異世界トリップ』というのをしたということね

……」

「そうとしか考えられません、とミサカは断言します。

なぜならミサカネットワークで伝えられた情報によると、検体番号200001号は現在、見知らぬ牢獄らしきところで、ワンピースに登場する『クロコダイル』と会話をしているところですから…

それに『「階段」という場所は異世界へ通じやすい』という情報を手に入れたミサカがいますし……と、ミサカは懇切丁寧に説明します。」

「…漫画の世界にトリップってわけかよオ…

で、どうすれば奴は帰って来るんだ？」

学園都市No.1の能力者^{イクタ}で、この病院に入院中の少年、一方通^{アクセラレ}行は先程から無表情で説明をしているクローン人間^{リアルナンバー}：検体番号10032号……通称：妹達^{シスターズ}or御坂妹に詰め寄った。

「異世界トリップというのは、何かしらの目的を達成しないと帰ってこれない場合が多いから……」

妹達^{シスターズ}の代わりに同じくこの病院に入院している科学者、芳川 桔梗が答える。

「この場合だと、おそらく『Eース救出』をクリアしたら戻ってこられるんじゃないかしら？
ただ……一生帰ってこれない場合もあるから、なんとも言えないけどね。」

「あいつ1人でEースを助けられるとは、考えられねえな。」

「じゃあ、君が助けに言ったらどうかね？」

「あア？」

「幸いにもバッテリーの予備はかなり用意したからね。」

「頂上戦争まで行くようだと、戦いが多いから予備は出来る限りたくさん用意しないと……」

「オイ、芳川！俺はまだ、行くとは言ってねえぞ！！！」

「あら？でも、この状況下で彼女を助ける力があるのは貴方だけよ？
幸いにもミサカネットワークが通じるから、貴方の演算能力も使えると思うし。」

「……っち、くそつたれがア！！！」

こうして、最強の能力者は階段でわざと足をふみ外したのだった。

「……おい！！イワちゃん！！誰か降ってきたぞ！！！」

新旧七武海のジンベエとクロコダイルを檻から出して、逃走経路を確保した時だった。

ルフィの目の前に突如、何もない空間から1人の少年が落ちてきたのだ。

白い短髪と赤い瞳に中性的な体格をしていて、杖をついていた。そして…白とグレーの縞柄の長袖Tシャツから察するに、囚人ではなさそうだった。

その少年はクロコダイルをまっすぐ睨んだ。

「…オイ。正直に答えろ。ここにガキが来なかったか？」

「ガキ？ああ……アホ毛のガキか？」

「クロコボーイの知りあい？」

「いや…さっき煩いくらい一方的にしゃべりかけてきやがった……
テメエがアレの保護者だったのか？」

「どこにいるんだ？」

「海の上です、とミサカは即座に答えます。」

「！？お前…いつの間に……」

振り返ると先程の妹達シスターズが立っていた。

「おっ！！お前も急に現れたな！！」

「ヴァナアタ…どうやって……」

「冥土返しに言われて来ました、とミサカは答えます。

私ならミサカネットワークで打ち止めの居場所も分かりますから、
とミサカは面倒なことに巻き込まれたことを恨みつつ、説明をしま
す。」

「それより、海の上ってなんだ？説明しやがれ！！」

「それはワシが走りながら説明しよう。」

ジンベエが前へ出た。

「早くしないとエース君の処刑も、彼女の処刑も止められなくなっ
てしまうのだからな。」

「そうだった！！！！急ごう！！……って、彼女も処刑ってどういう
意味だ？」

ルフィがイナズマの作った坂を走りながら問いかける。

「うむ。実はだな……………」

く回想シーンく

「うわぁ！！本物のエースだ！！ってミサカはミサカは興奮してる！！」

『エースはもう来ているって』クロコダイルが言ってたけど本当だったのね、ってミサカはミサカは一瞬疑ったことを心の中で謝ってみたり。てゆうか、本物のエースだよぉ！！！！」

1人の幼女がピョnpionと檻の前で跳ねていた。

「エース君の知り合い？」

「いや……………だれだ？」

「打ち止めてっていうの、助けに来たんだよってっミサカはミサカは胸を張って答えてみる！」

「ラストオーダー？変な名前だな。」

「へ…変な名前って……………これはミサカの意志で命名したのではないから、変って言われたらちよつと悲しいかもって、ミサカはミサカはしょんぼりとうなだれてみたり……………」

ってか、助けに来たんだよって言ったのに、何の感慨もないわけ？

ってミサカはミサカは疑問を問いかけてみる！」

「………… お前…ミサカって名前なのかラストオーダーって名前なのか、ハッキリしたらどうじゃ？」

「えつとね…………」

ミサカは御坂美琴のDNAマップを元に作られた妹達シスターズが反乱や暴走をした時に備えてつくられた上位固体で、他の個体に対する制御や命令権を持つミサカネットワークの管理者なの。

だから、口癖で一人称が「ミサカ」なんだよってミサカはミサカは説明してみるけど、理解できる？」

「いや、さっぱり分からねえ。」

っていうか、さっさと逃げやがれ！！あぶねえぞ！！」

エースが声を張り上げるが、幼女は動こうとしなかった。

「だって………… 見殺しには出来ないよってミサカはミサカは真剣に答えてみる。」

その瞳は言葉通り真剣そのものだった。まっすぐエースをみつめている。

「ミサカは単価18万円…………つまりこの世界に換算すると18万ベリシスターズで製造可能のクローンで、20000体の妹達の総称の事なのってミサカはミサカは妹達のせつめいから始めてみたり。」

で、妹達は「絶対能力進化（レベル6シフト）実験」で1号から1

0031号まで殺されたんだけど、それまでは計画のためだからって特に何も思わなかったの、ってミサカはミサカは告白してみる。たしかにミサカ単体が破壊されたときには、全ミサカをつなぐ脳波リンクからその個体の存在が消されるけれど、ミサカの最後の一体が死ぬまで破壊されたミサカの記憶や情報自体が消えるわけではないから、実験にはなんの損傷もないわけ。

でもね……ミサカ単体が死ぬことに涙を流す人がいるんだってことをミサカは知ったの。だから、これ以上は誰一人として死ぬわけにはいかないってミサカはミサカは宣言してみる!!」

「……なんか難しい話でよくわからないんだが……」

「つまりね……人造物のミサカ単体のために涙を流す人がいるんだから、貴方だって死んだら涙を流す人がいるはず、だから死ぬのは良くないってミサカはミサカは説得を試みしてみる。」

そういうと、打ち止めは優しい姉のように微笑んだ。
エースは何も言えなくなった。

「お前……」

「そこで何をやっている!!!」

その時厳しい声がとんだ。

打ち止めの後ろには、いつの間にか監獄長のマゼランをはじめとする監獄職員が立っていた。

「お前……」

「うひゃあ！！ちょっと不味い状況下もってミサカはミサカは恐怖でわなわな震える身体を押さえられなかったり…」

「この男を助けに来たのか？」

マゼランが問うと、打ち止めはガクガクしながらうなずいた。

「ラストオーダー！！逃げろ！！」

エースが力の限り叫ぶ……が……

「こ…腰が抜けて動けないみたい…ってミサカはミサカは現状報告をしてみる…」

顔が引きつっている打ち止め……

それを見たマゼランは……

（これはなんだ？）

現状把握に苦しんでいた。

服装や健康状態からさっするに、どう見たって外部の人間だ。しかも幼女…

侵入者の”麦わらのルフィ”と一緒に侵入したとも考えられるが、この幼女はなんでこの最下層のフロアにたどり着くまで、監視の目に留まらなかったのか……………そもそも、なんでこの幼女はエースを救出に来たのか……………

「おい、これもエースと共に連れて行くぞ。」

「えっ？」

マゼランについてきていた女職員は、急なことでイマイチよく分かっていなかった。

「しかし…拷問の上で監獄へほおりこめばいいのでは？」

「火拳のエース」を助けに、誰にも知られぬようにココまで来たコレがただモノに見えるか？

恐らくこれは……………

エースの実妹だ。

先程の会話の中にも、よく理解できなかったが「妹」という言葉が出てきたしな。

そうでなかったとしても、海賊を助けに向かったものへの見せしめともなる。

いずれにしろ、本部へ送った方が身元も早く割れるだろうしな。

……………連れて行け。」

「回想シーン終了」

「…………クソ餓鬼がア…………」

話を聞き終えた一方通行は、呆れと怒りがごちゃ混ぜになった声を出した。
アクセラレータ

「…麦わら。俺も仲間に入れやがれエ。オツと勘違いすんじゃないぞ？俺はアノ餓鬼を取り戻しに行くだけで、お前の兄貴なんて知ったこっちゃねエ。」

ただ、目的地が同じだから手を貸してやるってことだ。」

「…いいぞ。ってか、お前の能力ってなんなんだ？」

「…………気が付かねエのか？俺が今、どうやって動いていんのかをなア？」

そう…今、一方通行は、少し浮くようにして走っていた…否、走っているのではない。滑っていたと表記した方が正しいだろう。

「アルビダみたいな感じで『摩擦』をなくしてるのか？」

「摩擦ウ？違エな。」

これは反射…正確に言えば『ベクトルの向きの変換』だア。

そついやア…自己紹介がまだだったなア…………

俺は学園都市最強のLV5の超能力者…「アクセラレータ一方通行」だア!!」

白い髪に赤い目の少年はニタリと笑った。

第6話 彼を止める者は誰もいない

……海の上……

鳥の声1つしかない……聞こえるのは処刑台のある町へ近づいていく船の音のみ……

「悪いな。せつかく助けに来てくれたのにこのざまだ……」

もう二度と見上げることはないだろう空を見つめたままエースは隣にいる幼女「ラストオーダー打ち止め」に話しかけた。

「確かにミサカは貴方を助けられなかったけど……ミサカは全然不安じゃないよってミサカはミサカは自分の感情をあらわしてみる。」

「なんで不安じゃないんだ？」

「だって……あの人が助けに来てくれるから……貴方の弟と一緒にミサカ達を助けに来てくれるってミサカはミサカはミサカネットワークを通じて分かった喜びをあなたに伝えてみる……」

確かに打ち止めの声色には全く「死の恐怖」を感じさせないモノだった。

監獄で出会ったとき同様明るくて、楽しげな感じで話していた。

「ところで……ってミサカは話題を変えるけど……いい？ってミサカは

「ミサカは許可をとってみたい」

「？なんだ？」

「えっとね……」

『悟飯！』って言って欲しいの！！ってミサカはミサカは懇願して
みる！！

出来なかったら『魔貫光殺砲』でも構わないかも！！ってミサカはミ
サカは……」

「待て待て待て……」

今が護送中だということを忘れてツッコむエース。

「何を言わせたいんだ！？ってかどういう意味なんだそれ！？」

「だって……エースの声優さんとピッコロの声優さんは同じだから
……生エースの声が聞けたから、ついでにピッコロさんの声も聞きた
いかもってミサカはミサカは密かな願望を打ち上げてみたり！！」

「せ……声優ってなんだよ！それ以前に、ピッコロって何者だ！？」

「えっとね……ナメック星人だよってミサカはミサカはエースに教
えてあげることにする！！」

「人間じゃないのか！？そのピッコロって……」

「人間のわけないよ、肌が緑色で触覚生えてるし……でも、カッコ
イイんだよってミサカはミサカはピッコロさんのことを述べてみる
！！」

「……………」

「ねえねえ！！いってみてよ……ってミサカはミサカは目をキラ
キラさせながら懇願してみる！！」

「……………ま……『魔貫光殺砲』……………」

「だめ！！もつと低い声で！！ってミサカはミサカは注文を出して
みる！！」

あと、これはピッコロさんの必殺技の一つだから、もつとテンション
上げて言っただけいいかもってミサカはミサカは追加注文してみた
り！！！！」

「……………」

「ほらほら早くくくくってミサカはミサカは足をバタバタさせなが
ら懇願してみる！！！！」

「……………」
まかた「うんうんほつ
『魔貫光殺砲』！！！！！！」

「うわあ！！本物そっくりってミサカはミサカは感動してみたり！
！！！！」

（緊張感ねえなあ……………）

真つ赤な顔をしながらも、ピッコロをはじめとする古川さんの物ま
ねをするエースと、それにはしゃぐ打ち止めを見て、ため息を隠せ
ない護送警護中の中将を含む海兵たちだった……

Level 5 ↓ Level 4 への階段付近

そこを走り抜ける4つの人影があった。

「処刑つてのは、いつ始まりやがんだ!？」

「今が約10時前…処刑は午後の3時!!」

その時刻には必ず処刑は実行される!!!

白ひげのオヤジが来るとするのならその何時間も前にしかけるハズ。

エースさんはもう海の上!!!

戦いはいつ始まってもおかしくない!!!」

「3時まで殺されることはないんだな!!!ならまだ間に合う!」

「フン………」

クロコダイルが列から抜き出ると、扉の前に躍り出た。

「扉なんざ無意味…」

この右手は渴きを与える。」

彼が右手を当てると、扉が砂になって消えていく……

そう、彼はスナスナの実の能力者で、大ざっぱにいうと、右の手のひらはあらゆるものの水分を吸収し、砂へと変えることができるのだ。

扉の向こうには大量の獄卒が待ち構えていた。

「こちらLevel 4!!!!」

囚人「ジンベエ」「クロコダイル」侵入者「モンキー・D・ルフィ」
それから見覚えのない少年が現れました!!!!応戦します!!!!

撃て!!!!!!」

しかし、銃弾など砂人間のクロコダイルには無意味。

「バルハン三日月形砂丘!!」

獄卒を砂にするクロコダイル。その一方で…

「撃て!監獄弾だ!!」

「ゴムゴムのぉ……」

ルフィはそれを交わすと彼らの頭上に飛び上がり……

「雨!!!!!!」

回転状態で放つゴムゴムの銃乱打する。

「魚人空手 唐草瓦正拳」

ジンベエも正拳突きのような形を行った後、全方位360°に衝撃

波を発生させて、獄卒たちを吹っ飛ばす。

「うわぁー！勝てるわけがねえ！！……ん？おい、あの餓鬼はどうした！？」

見覚えのない少年の姿が見当たらなかった。

この戦いのさなか巻き込まれて死んだか？とその獄卒が思った時だった。

その少年はいた。平然とLEVEL 3 へ続く階段に向かって歩いてくる。彼はかすり傷一つ負わないで平然と笑っていた。

「撃て！！あの少年も妻わらたちの仲間だ！！」

「ア……めんどくせエなア……」

弾丸は彼に当たらずに、すべてが反射される……いや、正確な反射ではない。

そのすべてが的確に監獄弾を撃っていない獄卒にまであたるのだ。

一方通行はベクトルの向きの変換をして、銃弾をすべて監獄弾を持つていない獄卒に当てていたのだ。

が、もちろんそんなこと理解できる獄卒たちではない。

「どうしたア！？その程度かア！？」

その程度じゃアこの一方通行様は止まらねエぜ？

ってか、このままじゃア、てめエらは自滅だぜ？」

「か…構わん！！撃て！！数で何とか抑えろ！！」

構わず撃ってくる（ばかな）獄卒たち。

「はっ！！馬鹿だなア！！」

迷わず”向きの変換”をする一方通行。

その変換は極めて効果的な変換で、次々と監獄弾を持っていない獄卒のみ殺されていった。

「報告します！！！」

無線を使う獄卒。

「謎の能力者が現れました！！銃が効かず、ただの反射ではなく…その向きまでコントロール…うわああ！！」

「勝手に情報与えてンじゃねエの！！」

弾丸をものともせず…かといって槍を振りかざしてくる獄卒も近づきだけで吹っ飛ばされ…

まだルフィ達が後ろで戦っているのを感じながら先へと進む。

「貴様！！何者だ！！どこ出身だ！？」

「聞きてエのかア？」

俺は……^{アクセラレータ}一方通行。地獄の土産に知っておくんだな！」

学園都市最強の彼を止められるものは誰もいない。

彼は誰よりも早く、LEVEL 3へと続く階段を上り始めた。

第7話 助けられるものは助けるに越したことはない

「おい！！そういえば、アクセラレータの姿がみえねえぞ！！」

はあはあと荒い息をつきながらルフィは周りを見わたした。

ブルゴリの軍団や獄卒たちばかりで、特徴的な白髪のやせた少年が見当たらない。

「彼なら絶対に無事です、とミサカは断言します。」

軍用ゴーグルを装着し銃器を構える少女が言った。

「大丈夫って…何を根拠に言っているツチャブル？」

オカマ王イワンコフも言うが、少女は無表情のままだった。

「問題ありません。一方通行は現在予備のチョーカーをいくつも持っていますし、それに彼は学園都市最強の能力者で、一万体弱のミサカを無傷で殺した張本人ですから、とミサカはこいつらの頭じゃ分からないだろうと思いつつ説明します。」

「よくわかんねーけど、能力者なら心配いらねえな！

それより、出口はどこだ！？」

ルフィがLEVEL 4 の出口を探しているとき、すでに一方通

行はLEVEL 2 まで来ていた。

つい先ほどまでこのフロアには監獄長のマゼランがいたのだが、LEVEL 4 へ向かう大型リフトに乗り込んだところだったので、このフロアには毒の壁対策を考えているバギーとゆかいな仲間たちしかいない……

が、そんなことは最強の能力者には関係ない。

「な……なんだお前!？」

「脱獄者には見えないんだカネ!!」

とかごちゃごちゃ言う奴らには見向きもせず、ただ毒の壁をじいつと見た。

「……毒か……めんどくせエ……」

チョコレート電源を入れ直すと、毒の壁に手を伸ばす。

「おい!! あぶねえぞ!!」「自殺行為だ!!」

「うつせエなア……」

彼が毒の壁に触れるや否、彼の能力によって毒の壁は反射され、向こう側へと吹き飛んだ。

毒が消し飛んだのが分かったと、チョコレートの電源をいったん切る。

「おお!! すげえ!!」

「LEVEL 1 への道が開いたぜ!!……って……」

壁の向こう側に立っていたのは……黒いひげを生やしたデカい男が率いる謎の集団だった。

「ゼハハハハ！！面白い能力だな、小僧！！」

「……………」

「どうだ？俺の仲間になんねえか！？」

「…くだらねエ……俺は自分の目的を果たすだけだ。」

ここで上条当麻や御坂美琴、おそらく打ち止めやその他、異世界トリップした一般人だったら目の前の男”黒ひげ”に敵意や悪意・憎悪といった感情が沸々と湧き出てくるだろう………が、彼は違った。

彼はエースの処刑なんて知った事ではない。

海軍にも海賊にも興味がない。

物語の主人公・ルフィが今、ハンニバルと戦ってこの後すぐ、マゼランとまた戦うなんて知った事ではない。

彼の目的はただ一つ……あの少女……ラストオーダー「打ち止め」を助け出すこと……
そのためだけに動いていた。

（確か……この世界の移動手段は『船』だったんだよなア……となる
と軍艦を奪うしかねエか
つか、なりゆきで『協力する』ことになったアイツらが全然現れる
気配しねエ……）

後ろを振り返るが、囚人たちを開放しながらはしゃぎまくるバギー
たちしかない。

……どうやら一人で軍艦を調達しなければならないみたいだ。

外へ出ると、マゼランの命令で船が今まさに海へ乗り出そうとして
いるところだった。

「どれにしようかなア」

一方通行はニタリと笑みを浮かべると、チョーカーの電源を再びON
にした。

「一人で残る気ですか、とミサカは心の中を見破つてみます。」

ミサカは包帯グルグル巻きでクルクル回っている男……いや、オカマ
のMr.2 ボン・クレーに問いかけた。

彼は一方通行が手に入れた船にまだ、乗っていないかった。

……ジンベエ達やバギー一行がこの場所に着いたとき、10隻あつ
た船のうち、この船を残し、他の船は人の屍を乗せたオンボロ幽霊
船とかしていた。

ルフィが着次第、いつでも出航できる……それなのに、ボン・クレ
ーだけが乗船していなかった。

「誰かが残つて『正義の門』を開けないといけなのよ。

あつしが一番確実にできる……！」

『正義の門』……インペルダウンを取り囲む門……これは内側から
開けないと開かない……」

「確かに成功確率は99%です、とミサカは分析結果をいいます。ですが、そのあとはどうするつもりなのか、とミサカはそのあとに待っている運命が分かっているのか聞いてみます。」

「それ聞くのヤボじゃナイ？」

苦笑するボン・クレー……ミサカは無表情のままだった。

「私の方が安全かつ正確に開けることができます、とミサカは宣言します。」

「あんたね……分かってるの！？」

あの門を開けるにはここに残る……つまり、誰かが犠牲にならないといけないってことなのよ！！

アンタは脱獄囚ですらないじゃナイの！！」

「……確かにそうですが……」

ですが、ミサカ的能力を駆使すれば船の上からでも開けることができます、とミサカは断定します。」

ボン・クレーの顔に驚愕が走った。

「ええ！！あなた、能力者だったのー！！」

「ええ。ミサカは……」

「おい！！みんないるかー！！！！」

「麦ちゃんのこえー！！」

ボン・クレーが振り返ると……………

「逃げるぞ！！軍艦はあるかっー！！！！」

こちらに向かって走ってくるルフィ達が出た。

……………猛毒を滴らせる監獄長のマゼランを連れて……………

「「「なんかすごい連れてる！！！！」」」

「確かに連れていますが…原作とは違い、こちらには船があります。だから少しは動揺が少ないようですね、とミサカは分析をします。」

「原作？」

「あなたには関係ありません、とミサカは断言します。では、私達も乗船しましょう。」

ボン・クレーやミサカ、ルフィ達も乗り込み、マゼランにやられたはずのイワンコフも『地獄ウインク』で地上に戻る事ができ、船は出航した。

「いったいこれはどういうことだ……………」

残っている船が全船、使えない状態になっていた。

「一体どうしたことだ！！」

微かに息のある獄卒に尋ねる。

「はぁ…はぁ…白髪が悪魔が…赤い目をした痩せた少年が…
たったひとりで…」

「たった一人!？」

「は…はい…攻撃を全て跳ね返し…何をしても歯が立たず…」

そんな囚人…聞いたこともない…驚愕を隠せないマゼランだったが、ここは冷静になるように努めた。

「まあいい…正義の門が開けられることはない。

奴らはあのままあそこで立ち往生をし、逃げることは出来ない。対策はゆっくり考えれば……」

マゼランは己の目が信じられなくなった。

正義の門が…開き始めている……

マゼランは動力室に走った。

「はぁ…はぁ…動力室!!何をしている!!!」

「そ…それが…何者かにハッキングされたらしく!!
こちらからのコントロールが出来ません!!!」

「なんだと……！」

「……うまくいったのはミサカのお蔭ですね、とミサカは原作を変えたことを自慢してみます。」

「……この手があったとはなァ……そーいや、てめェーも能力者だったな。」

弱すぎるから忘れてたぜ。」

「……一応これでもレベルは2〜3なんですよ、とミサカはシヨツクを少しつけたのでうなだれます。」

ミサカ…シスターズ妹達の能力はレベル2〜3程度の発電能力『レイオノイズ欠陥電気』。
本物の御坂美琴の『レールガン超電磁砲』には二万體全員でかかっても齒が立たないとされているが、ハッキングなんてお手の物だった。

「でも……少しは人のためになれてよかったです、とミサカは安堵します。」

ルフィ達と笑っているボン・クレーを見たミサカ。

……本来なら彼が開けていた正義の門……

原作にはない仲間を加え、ルフィの奪った軍艦は……処刑の行われる

街、マリンフォーフォードへとタライ海流に流され進んでいく……

第8話 父親ってろくでなしに見えることが多い

「うわぁ………すげえな………」

ぐるりと360度どこを見ても水・水・水………まるで水中トンネルを思わせるところだが、水中トンネルの中ではなく、上条当麻は海の中にいた………しかも乗船している船ごと………。

上条は妙な事に気が付いた。

海の中にいるのになにも生物の気配がしない………

ONE PIECEの世界なんだから人魚や魚人がいてもおかしくないのに、魚一匹すら見かけなかった。

海の生物たちは、これから起こることを予測しているのだろうか？
そう考えると少し気味が悪くなってきた。

「ちょっと………聞いているの………」

ビリビリつと前髪に青白い電気を走らせる美琴がバシィつと上条の頭を叩いた。

「いてっ！聞いてますとも………」

ただどういう技術で海の中を船が進んでいるのか、気になったけだっ………て………」

「………そっか、アンタの知識はまだシャボンディまでいってないの

よね……

いいわ！！この美琴様が教えて上げる！！」

美琴が得意そうに腕を組む。

「見て分かると思うけど、船の周りをシャボン玉で覆うのよ。これをコーティングっていうの。」

えっと……たしか、船全体をヤルキマン・マングローブのシャボンで包みこむことで海中航海を可能にするの。これは深海1万mの水圧にも耐える事が可能で、多少の穴が開いたくらいでは影響はないんだけど、海王類などに噛まれて多数の穴が開けば潰れるのよ。」

「へえ……学園都市も真つ青な技術だな。」

「そういうこと。」

で、話を戻すけど……アンタは何をするのか分かった？」

美琴が話を”作戦”の方に戻した。

作戦とはもちろん、エースをいかに被害最小限で救い出すかという作戦だ。

原作を知らない上条は美琴にまかせっきりだったのだが……

「でもさ、これって俺、あんまり必要なくない？
ってかさあ、俺、いらなんじゃない？」

作戦内容を聞いた上条がツッコむ。

「だって、アンタの能力は確かに凄いけど、敵さんは能力＋体力＋腕力…ついでに脚力もあるの。」

能力者だからって一方通行やアタシみたいに能力に頼り切っている奴は少ないの。

ほら、例えばエースだって、能力者だからそれに頼り切ればいいのに、筋肉が凄いでしょ？だから、仮にアンタの力で能力を消したところで気休めにしかないのよ。」

「……ってことで、俺はこんな役回りしかできねえってのか……」

なんかやるぞ！！って盛り上がったのに……不幸だ……」

がつくし…と肩を落とす上条…

「まあ、気になさるなって！！これも重要な仕事よ！？」

美琴が上条の肩を笑いながら叩く。

「うう…中学生に慰められる高校生って……」

ってか、前もこんなこと感じたような気が……」

上条の憂鬱に関係なく…白ひげ海賊団はマリンフォードへ進んでいく……

海軍本部のある島” マリンフォード”

ここにはおもに海兵の家族が暮らす大きな町がある。

現在、住人達には避難勧告が出ており……

避難先のシャボンディ諸島からモニターによって…人々は公開処刑の様子を見守っていた。

各所から集まった記者やカメラマンたちもまた

ここから世界へ情報をいち早く伝えるために身構えていた。

海軍から出される監視船は出航の度に撃沈され、”白ひげ”の情報も皆無……

マリンフォードに集まる緊張は高まるばかりで

せまる処刑の時間までとうとう3時間をきっていた。

ここには世界各地より集められた名のある海兵たち総勢約10万人の精鋭がにじり寄る決戦の刻を待っている……

三日月形の湾頭及び島全体を50隻の軍艦が取り囲み、湾岸には無数の大砲が立ち並ぶ…

港から見える軍隊の最前列に構えるのは、戦局のカギを決める曲者たち

海賊”王下七武海”

そして広場の最後尾に高くそびえる処刑台には事件の中心人物

白ひげ海賊団二番隊隊長”ポートガス・D・エース”が運命の刻を待つ…

その眼下で処刑台を固く守るのは、海軍本部最高戦力

3人の”海軍大将”

今考えうる限りの正義の力が、白ひげ海賊団を待ち構える……

が、そこにイレギュラーが混ざっていた。

「…おい！エースの横にもう一人…誰かいるぞ？」

「本当だ！ってかアレ……子供じゃないか？」
「エースとどういった関係だ！？」

ざわざわと報告とは違う事態に周囲と話す海兵たち……だったが、
処刑台に海軍大将・仏のセンゴクが現れたことで水をうったかのよ
うに、シーン……となった。

アフロヘアーと口ひげが特徴で、実物大のカモメのオブジェを載せ
た軍帽と黒縁の丸眼鏡を着用している男……それが海軍元帥・センゴ
ク……。

センゴクが手のひらに載せている電伝虫を使おうと口を開いたその
とき……！

「うわぁ……！あそこにスモーカーがいる……！ってミサカはミサカは
原作キャラに指をさしてみたり……！っていうか、手錠されているから
本当は指をさしていないんだけど、心の中では指しているからそれ
でいいか、ってミサカはミサカは自分で納得してみたり……！」

……エースの横で手錠につながれていた打ち止めが声^{ラストオーダー}を上げた。

シーンと静まり返った中だったので、彼女の甲高い声は島全体に響

き渡っていた……
もちろん、シャボンディ諸島のモニターを通じて、シャボンディ諸島にも……

「スモーカーさん……知り合いですか？」

彼の部下で眼鏡の女剣士・たしぎ少尉が尋ねた。

「いや……しらねエ……だれだあれ？」

常に2つの葉巻を吸っているほどのヘビースモーカーで、自然系悪魔の実・モクモクの実の能力者・白狐のスモーカー准将は少し眉間にシワを寄せた。

あんな小娘みたことがない。なのになぜかものすごく馴れ馴れしい……
……
忘れているだけかとも思ったが、全く記憶にない……。

「ねえねえ、結局”けむりん”って誰と付き合っているの？ってミサカはミサカは長年の疑問をズバリ聞いてみた！」

「てめえ！！何を分わけわかんねエこと言ってるんだ！？」

「ってか、そのあだ名は止める！！」

「ええ！？なんで？ってミサカはミサカは抗議の色をあらわしてみたり！！」

「っていうか、質問に答えてほしいんだけど、ってミサカはミサカは

口をタコのように膨らませてみる！

ねえ、誰？たしぎ？それともヒナ嬢？どっちってミサカはミサカは二択にしてみる！」

「どっちでもねえ！！！」

一体そのガキは何者なんですか！！！」

スモーカーはセンゴクにむかって声を張り上げる。

「分かった。今から説明しよう。」

センゴクは、実は自分も気になっていた事柄だったのに話題を変えられ、少し機嫌が悪かったが、気を取り直すことにした。

……で、話が始まったのだが……若干2人……怒りに燃えてセンゴクの話など耳に入らない男たちがいた……

「ゆるさねえ……アイツもヒナ嬢を狙っていたのか……！！！」

「愛しのヒナ嬢はこのフルボデイのものなのだ。だれにも渡すものか！」

海軍大佐・黒檻のヒナの部下で雑用要員のジャンゴとフルボデイが沸々とライバル出現の怒りに燃えていた……

が、そんなことはどうでもいいので、さっさとセンゴクの話に戻すことにしよう。

「…エース…お前の父親の名前を言ってみろ。」

「俺の親父は…白ひげだ!!」

苦悶の表情の後、エースは絞り出すように答えた。

「違う!!!!」

「違わねエ!!!他にいねエ!!」

「……南の海にバテリラという島がある……」

母親の名前はポートガス・D・ルージュ……

この女は我々の頭にある常識を覆し…我が子を思う一心で海軍の目を欺くために、20か月もの間エースを胎内に宿し続けた……」

センゴクの重々しい口からエースの出生の秘密が語られていく……

「そしてお前を生むと同時に力尽き果て死んだ。」

父親の死から一年と三か月を経て……世界最大の悪の血を引いて生まれてきた子供…それがお前だ。」

打ち止めが現れた時以上にざわつく海兵たち。
エースが唇を噛みしめ下を向き続ける…

「お前の父親は海賊王”ゴールド・ロジャー”だ！！！！」

「……………！！！！！！？」

周囲に今日最大のざわめきが走った。

シャボンディにいる記者の中には手帳を落とす者までいた。

「い…生きていたのか…海賊王の血が…」

「じゃ…じゃああの女の子は？」

「白獺の知り合いか？それがなんで処刑？」

「この少女…ラストオーダーは誰にも見つからずに地獄の監獄・インペルダウンに侵入に、エースの元へとたどり着いた……まあそこでとらえたわけだが……」

インペルダウンの職員が言うには、彼女は”エースの親族”らしい
……」

正確にはインペルダウン職員は”妹”と伝えられたのだが、伝言ゲームに例えると分かりやすいと思うが、最初は”妹”と伝わってきたのに、いつのまにか”親族”に変わり……そのままセンゴクの耳に入ったのだった。

「それもただの親族ではない…

お前がいつ生まれたか言え。」

「言っても分からないと思うけど…

ミサカは元々筋ジストロフィーの治療という題目で御坂美琴が提供したDNAマップを元に作り出されたレベル5の「超電磁砲^{レベルガン}」の量産を目指す「量産能力者計画^{レイオノイース}」の上位固体で、薬を投与したりして成長を速めたから、こう見えて実は生まれてから1年もたつてなったり、ってミサカはミサカは自分の出生について語ってみる。」

「……つまり、少し頭がおかしい子だ。」

「おかしいって女性に対して失礼かもって、ミサカはミサカは地団太をふんでみたり……」

「つまり、こうして複雑な嘘までついて必死に素性を隠そうとしている……

そこまでして隠す必要がどこにある？

ちなみにルージューにもロジャーにも兄弟はいない。

彼らの両親も彼らが幼い時に他界しており、彼らにも兄弟はいない…

なのに”親族”と名乗る少女……

そう…つまり、エースの実子……!」

「……!!!!!!?」

さらなるざわめきが沸き起こった。

「ガーブ…本当かい？」

一応エースの育て親…海軍中将ガーブに、同じく中将の紅一点…にしては歳を召されているツルが尋ねた。

「いや、知らん。馬鹿者が…」

あんな可愛い娘を作ったならなぜワシに報告せん!!」
「ちげえよ、ジジイ!!!!!!」

ガーブの声を聴いたエースが声を張り上げた。

「嘘はいかんぞ、エース!!」
「いったいいつ作ったのじゃ!!いや、そもそもその子の母親はどうした!!？」

「母親も何も俺の子じゃねエ!!!!」

「”白ひげ”の所の女か？ナースか？」

「だから!!聞けって!俺は……………」

「センゴク元帥!!報告します!!」

「!？」

いきなり声を上げた海兵…ものすごく必死な顔をして敬礼をしてい

た。

なんか涙が出かかっていた。

「せ…『正義の門』が誰の指示もないのに開いています！
動力室とは連絡が取れず…」

「なんだと!？」

見てみると、確かに開いている……

エースもガープも言い争いをやめてしまった。

「来たぞおー！ー！！全員戦闘態勢！！」

「突如現れたぞ、一体どこから！！！」

ゴゴゴー！と音を立てながら徐々に近づいてくる船…
それも一隻に二隻ではない。

個性それぞれの色を持つ大艦隊だった。

海軍は大慌てだった。

「海賊船の大艦隊だあ！！」

”白ひげ”はどこだ！？確認しろ！！」

”遊騎士ドーマ””雷卿マクガイ””ディカルバン兄弟”…”大
渦蜘蛛スクアード”………！！！！

総勢43隻…”白ひげ”と隊長たちの姿がありません！！

しかし間違いなく傘下の海賊たちです！！！」

「……………」

……………お前らまで……………！！！」

いつの間にかエースは小刻みに震えていた。

センゴクを含む海兵たちは”白ひげ”がいないことに氣をとられていて、そのことに気づいていなかったが、打ち止めは氣が付いていた。

「ほらね、みんなエースが死んじゃうの嫌なんだよってミサカはミサカはニコツて笑いかけてみる。」

そついつてエースに微笑むミサカ。

「親父さんはちゃんと来るよ、ほら！もうそこまで来てるってミサカはミサカはネタバレを試みたり！」

「！？どこにいるんだ！？」

「よゝゝく耳をすましてってミサカはミサカは助言を試みたり！」
「？」

エースはじつと耳をすました……………聞こえるのは海兵の声と傘下の海賊の声……………
その時だった。

ゴボボ……ゴボボ……

耳にとらえるは泡の音……

「まさか!!!」

そのことにセンゴクをはじめとする何人かの海兵が気づき始めた。

「えっ!この音……どこから?」

ゴボボ……ゴボボボ……

一般海兵たちに聞こえるくらい大きくなってきた泡の音……

「……………こりゃあ、とんでもねえ場所に現れはしねえか?」

「布陣を間違えたかねエ」

みるみる間に三日月形の湾内に四つの巨大な影が浮かび上がってきた。

「湾内に海底に影が!!」

「まさか……」

そうだったのか、あいつら全船……!!

コーティング船で海底を進んでたのか!!」

驚きの色を隠せないセンゴク…

ザッパアアン!!!!!!!!!!

突如、巨大な白い鯨型の海賊船が湾内に姿をあらわした!

「”モビー・ディック号”が来た!!!!」

「次いで3隻の白ひげ海賊団の船!!!!」

新たに現れた3隻の船はモビー・ディックより少し小柄な黒鯨型の船だったが、巨大であることには変わらない。

「湾内に侵入されました!!!!14人の隊長もいます!!!!」

「”白ひげ”……………」

恨みのこもったまなざしをむけるセンゴク…

「グララララ……何十年ぶりだ？センゴク……」

カッン…カッン…とモビー・ディック号…白鯨をかたどったの頭部
に向かって進む足音が響く…

「俺の愛する息子は無事なんだろうな……！！！」

三日月のような白ひげを蓄えた、地肌に直接コートをマントのよう
に羽織っている、常人の数倍はある体躯の筋骨隆々の大男……”白
ひげ”こと……”エドワード・ニューゲート”が姿を現した。

「グララララ……」

ちよつと待つてろ…エース！！！」

なんで来たんだよ……おれなんかほっておいてもいいのに……

「オヤジイイー！！！」

エースは力いっぱい叫んだ。

第9話 誤解は誤解を生む

「まさかこれほど急接近されるとは…」

グララララッと笑う男を見て苦々しげにつぶやく海軍元帥・センゴク…

先程までの空気と一変。辺りは緊張という文字が支配していた。

…それは無理もないことかもしれない…

かつて海賊王ロジャーと唯一互角に渡り合った、大海賊時代の頂点に君臨する「世界最強の男」。「ひとつなぎの大秘宝」^{ワンピース}に最も近い存在とされ、その伝説的・怪物的な雷名は世界中に轟いている男…それが目の前に突然現れたのだから…

「…」 白ひげ” ってどんな技を使うんですか？」

1人の海兵が隣にいる先輩海兵に尋ねた。

「ば…バカ！お前知らないのか！？」

「え…？」

「よく見ているよ…こんな戦い滅多にない…」

アレは…世界を滅ぼす力を持っているんだ…」

「世界を…滅ぼす？」

なんだかスケールがデカい話だ…

確かに今、何か力をためるように腕をクロスさせているあの男からは威圧感を感じる……が、威圧感で言えば七武海やセングク元帥…青キジをはじめとする3人の大将達からも威圧感を感じる……彼ら全員の力を合わせれば楽々あんな爺さん倒せるんじゃないか？

恐れることはない…と思う。あんな爺さん…俺たちの正義に勝てるはずはない！

先輩海兵達はビクビクしていて唾を飲みこんでいる…が、俺はあんな爺さんには負けない。

でも……

”白ひげ”がニヤリと笑みを浮かべ、クロスさせていた両腕をほどいて、まるで壁に叩きつけるように空気を一気に叩いたとき……俺はその考えが甘いことに気が付いた……

”白ひげ”の叩いた空気にビシビシッとひびが入る。

そして波が…海が…グググッと持ち上がり、それにつられて俺たちのいる陸地もぐらりと持ち上がったのだ！

……すぐにそれは収まったが…こんなことで終わるわけがない……

ふいに安全なところにいる家族の顔が浮かんだ……

…俺は…帰れないかもしれない……

俺は首を振って、そんな不吉な想像を消し飛ばそうとした。

ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ……中将だって全員集まっている……

俺は…安全だ。

絶対に…生き残ってやる！俺はそう誓った。

「うう…今のがさつき言ってた”海震”って奴か？」

「そう。親父さんは”グラグラの実”の能力者で空間を殴りつけ大気にヒビを入れることで震動を起こす事が出来る地震人間なの！超人系悪魔の実の中では最強よ。」

「最強…か…」

上条当麻は美琴の説明を聞いて納得した。

地震は”津波”を呼び起こす……それは舞台のほとんどが”海”というこの世界にとって恐怖となるからだ。

津波の対処策は”とにかく高台へ逃げる”こと……だが、船に乗っていて津波が突如来たら…逃げられない……

つてか、まずここにも高台ないし……俺たち…無事だよな？いくらなんでも”自滅”はないよな？

「……ところで……御坂。エースの隣に座ってるのって……妹達シスターズに見えるんだけど、何者なんだ？」

「へっ！？」

頓狂な声を上げた美琴は、じいっと目を細めてエースのいる処刑台を見た。

状況が理解できなくて思考がフリーズする美琴……

「なんで見捨ててくれなかったんだよ！！
俺の身勝手でこうなっちまったのに……！！！！！」

そうしているうちにエースが叫び声が耳に届いた。
その言葉を聞いたとき、上条の中で何かがキレた。

「見捨てられるかよ！！！！！」
「！？」

”白ひげ”が何か言おうとしていたみたいだったが、上条の方が早かった。

「お前は……この船の”家族”なんだろう！？
家族を見捨てる奴なんてどこにいるんだよ！」
「……！！？」

でもよお…俺はその”家族”の制止を振り切って、勝手に負けたんだ！俺の責任だ！！」

「…いや俺”行け”と言ったはずだぜ…息子よ…」

「……………！？嘘つけ！！」

嘘つくんじゃないよ、親父いい！！！」

「いや”行け”と言った…そうだろ？マルコ…」

「ああ…俺も聞いたよい！！」

とんだ苦勞をかけちまったな、エース！！」

パイナッブル頭の一番隊隊長のマルコが静かな怒りを身にまとっていた。

「この海にいる奴ならだれでも知っているはずだ……

俺たちの仲間に出せば一体どうなるかってことくらいはな！！

！！」

「お前を傷つけた奴は誰一人として生かしちゃおけねえ、エース！

！！」

「待つてろ！！…今助けるぞおお！！！！！！」

ウオオオオつと声上がる。

「グララララ！！」

ところでセンゴク………処刑する人数が増えてねえか？」

”白ひげ”も気になっていたのだろう……処刑台の上にはエース以外のイレギュラーがいることに……

センゴクは眉を上げた。

「お前は知らなかったのか？

これは……エースの実の娘だ……」

「……ええっ……！！！！！！」

先程までの”士気”より”驚愕”が勝った”白ひげ”海賊団……船という船から驚愕の声が上がった。

白ひげの声にも驚きの色が混ざった。

「……エース……俺の孫を作ったなら俺に何故言わん……」

「お……親父！これは誤解だ……！！」

「……たたく……まだシラをきるのか、エース？

それよりも……おい”白ひげ”……何を言っている……！？

この娘がエースの娘なら……ワシの”孫”じゃ……！！」

海軍中將のガープが声を張り上げた。

「ジジイの孫は”ルフィ”だろ！！
ってか、本当に俺の娘じゃねエ！！！！」

「グララララ……エースは俺の息子だア……ガープ。
つまりエースの子は俺の孫だ。」

「何を言うか！！」

ワシは悪党に同情はねエ……

だが、エースを引き取って”強い海兵”になるために育てたのはワシじゃ！！

エースはワシの家族！！

つまりワシの孫じゃ！！」

「ちよつとミサカを取り合わないで！！つてミサカはミサカは”一度は言ってみたいアニメヒロインのセリフ”を声高々に叫んでみた
り！！」

「……………つて、やっぱりお前！御坂妹かよ！！つてか……御坂妹より
小さいから御坂妹の妹か！？」

上条は叫ぶと、口論がピタリ……とやんだ。

「と……トリップしたのはミサカだけじゃなかったのね！！つてミサカはミサカは驚いて目を丸くしてみたり！！

ほ……本当はこの場で貴方にミサカ達が受けた恩を返したかったりするんだけど、ちよつと難しそうだからミサカはミサカはしょんぼりうなだれてみる……。」

「やっぱり御坂妹か！！…………でもなんかしゃべり方が違うみたいな

……」

「それ以前にサイズも違うでしょ!!」

「……おい……アレはまさか……」

センゴクがじいっとこちらを見てきた。

その視線の鋭さに思わずビクツと体が震える上条と美琴……
タラリ……と冷や汗まで出てきた……

「まさか……エースの女か!?!」

「は……はいいい!?!」

これ以上ないってくらい真っ赤になる美琴。

「お前……」

「じょ……冗談じゃないわよ!?!」

わ……私はエースと直接会ったのは今日が初めてだし!?!」

しかし、いくら否定しても一度広がった噂は止められない……

「そうか……実は一度トリップしていたから俺たちの世界について詳

しいんだな!!」

「なるほど…だからトウマが知らないことまでミコトは知っているんだな!!」

「水くせえじゃねえか!!なんで教えてくれないんだ?」

「エースの嫁ってことは、俺たちにとって姉御みたいな感じになるって事か?」

新たな事実…といっても誤解なのだが…を知った海賊たちは現状を半ば忘れて美琴に群がる……

「だ〜から!!違うつて言ってるでしょ!!
ほら!アンタもなんか言いなさいよ!!」

美琴が上条の方を向く…と、上条は思案顔でこういった。

「そうか……お前は一度こっちにトリップしてたのか……」

ぷっちん

「だから違うつて言ってるでしょ!!!!」

キンつと小さな金属音……

美琴の親指が、一枚のコインを弾いた音だった。コインはゆっくりと、ゆっくりと彼女の頭上を舞っている。

「うわっ！…ちょっとタンマー！」

「問答無用よ！…どうせアンタには……」

コインが再び美琴の親指に着地した。

「……こんな攻撃効かないんだから……！」

瞬間！！

彼女の異名・超電磁砲^{レールガン}の由縁ともいえる一撃が、解き放たれた。

コインは空気摩擦で赤熱し、オレンジ色のレーザーと化して上条に襲い掛かった。

「や…やめろって……！」

上条は超電磁砲^{レールガン}を紙一重でかわす。

そのまま超電磁砲^{レールガン}は処刑台へとツッコんでいく…

「やれやれ仕方ないねえ………」

色の薄いサングラスとストライプの入った黄色のスーツを着用した

”ピカピカの実”の能力者……海軍大将・黄猿…本名・ボルサリーノが足を振り上げた。

あまのいわと
「天岩戸」

彼の足に光が集まり、レーザー光線となって超電磁砲と激突した。

ズウドオオオン……！！

つという音と共に相殺される天岩戸と超電磁砲。相殺された余波の爆風で建造物が破損した。

「……あの娘…能力者だったのか！？」

「黄猿の攻撃とほぼ同等の攻撃力を持つだと！？」

「お姉さまは学園都市N.O.3の能力者で”常盤台の超電磁砲”レールガンと呼ばれているんだよってミサカはミサカはって…ひゃあ！！」

ラストオーダー
打ち止めは突如感じた揺れに驚いた。

ズズズズズズ……！！

驚いたのは打ち止めだけではない。

海兵から七武海まで…突如始まったの地鳴りに対して動揺が広がっていく……

「何だ、この地鳴りは……!!」

「そら来たぞ……」海震”が”津波”に変わってやってくる……!!」

次の瞬間！海兵たちの目に信じられない光景が飛び込んできた。

「な………なんだよアレ………」

上条も目の前に起きている出来事に驚愕の色が隠せなかった。

「実際に聞くのと見るのは違うわね………」

”グラグラの実”の能力者で『地震人間』エドワード・ニューゲートの親父の作り出す津波は………」

美琴も思わず目を見開いてしまった………この光景は漫画で知っているはずだった………」

だが、実際に現実の光景として見てみると………これが現実かと疑いたくなるような光景だ。

いつのまにか身体が武者震いをおこしていた。

マリンフォード……海軍本部を挟み込むように、島全体をも飲み込むことが可能な巨大さの津波が襲い掛かってきたのだ……!!

開戦の士気を高めるためセンゴクが海兵に向かって叫んだ。

「勢力で上回ろうが勝ちとタ力をくくるなよ……!!
最期を迎えるのは我々の方かもしれんのだ………」

……あの男は……

世界を滅ぼす力を持っているんだ！！！！！！」

攻め入るは――

「白ひげ」率いる新世界47隻の海賊艦隊

迎え撃つは――

政府の二大勢力「海軍本部」「王下七武海」

誰が勝ち誰が負けても……

時代が変わる！！！！

第10話 死にそうになることって朝から何回もあったりする

「すげえ……」

上条当麻は目の前で行われている戦いに手に汗握っていた。

……まず仕掛けたのは親父……つまり”白ひげ”の方だった。

先程の白ひげが起こした”海震”で起きた特大の津波が海軍を襲う。それはマリンファードに覆いかぶさるように襲ってきているので、彼らに逃げ場はない。

「自滅って展開にならなくてよかった……」

「グラララララ……」

おれがそんなヘマすると思うのか、トウマ？」

「親父がそんなことするとは思えないけど、俺って不幸体質だから……」

だが、これであっけなく幕引きになるとは思えない……だったら、美琴があんな真剣な顔しているわけがない。きつとなにかがあるはず……

その時だ。なんか全体的に青のイメージの男が宙に浮いていた。……まるで津波を止めようとするかのよう……

「おい、御坂…あれは？」

「あれは海軍の大將”青キジ”よ。本名はクザンっていう”ヒエヒエの実”の能力者だ…って…あんだ！！知らないのそんなことも！？」

「知るかよ！！どうせ俺の知識はアラバスタ止まりだよ！！」

青キジという男は津波に向かって両手を広げた。

すると青キジの両方の手のひらから、氷がまっすぐに津波に向かって伸びて行った。

「アイスエイジ
”氷河時代”！！！」

その瞬間！！

パキパキっという音を立てて、あっという間に津波が凍りついていったのだ！！

「そうか……凍らせるから”ヒエヒエ”なんだな……」

「だからアイツは船を使わないで自転車で海を移動しているのよ。」

「へえ……って、マジで！？海王類とかにあったりしたら……」

「海軍の実力者トップ3が海王類に負けるわけないじゃない。負けたなんて言ったら切腹モノよ。」

冷めた目で上条を見る美琴……

白ひげは一発で終わらせられなかったからだろうか？苦々しい顔を
した。

それから重そうに口を開いた。

「青キジイ……！！若僧が……！！」

すかさず白ひげに向けて攻撃を仕掛ける青雉。

「バルチザン
”両棘矛”……！！」

4本の氷の槍が放たれる！

だが、白ひげは怯む事なく青雉の方に拳を振るって大気にヒビを入
れる。

「あらら
」

青キジはそうつぶやくと、槍と一緒に青雉の体が粉々に崩れて、海
へ残骸が落ちていく。

「おい！！大將がアレでいいのか！？
ってか確実に今のは”あらら”って問題じゃないよな？あんな軽い

ノリですむ問題じゃ……」

「いいから黙ってなさいって!!」

前髪にビリビリつと青い電気を走らせる美琴……話の展開も彼の能力も分からない上条は黙って青キジが落ちていくのを見ていた。

だが、青キジは無事だったみたいだ。

海上で氷の体になって再生したのだ。……美琴はイライラしているので確認をとることは出来ないが、おそらく彼の実の能力に関係しているのだろう。

クロコダイルの”スナスナの実”みたいに”自然系”ロギアの悪魔の実の能力者って再生能力があるみたいだから、おそらく”ヒエヒエの実”ってのも、その一種なのだろう。

そう思っているうちに、再生した青キジが海を凍らせていった。

……海が凍ったことでもう……船は引き返せない……

悪く言えば、帰りにくく（逃げにくく）なった。
だが……よく言えば……足場が出来た。

それを思ったのは他の人も同じだったのだろう。
次々と戦場へ降りて行った。その中には先程、上条や美琴を取り囲んでいた”隊長”と呼ばれる人たちも混ざっていた。

「ぐひゃひゃひゃひゃ！！！」

氷漬けの海とは気が利いている！！」

「気持ちに燃えたぎって暑苦しかったところだ！！」

口々に叫ぶ海賊たち……いや……「ひゃひゃひゃ」はないだろ……なんか、そのしゃべり方だと”死亡フラグ”立ちそうだぞ……っと上条は思った。

「撃ちこめええー！！！」

海賊たちが大砲をぶつ放す。が、弾が海兵たちに届くことはなかった。

その前にスパンっとまっ二つになってしまったからだ。

「海軍の”中将”達だ！！」

どこからか海賊が叫ぶ声が聞こえる。

確かに強そうな面々がズラリつと勢ぞろいしていた……中に長老みtainな雰囲気醸し出した老女も混ざっていたが……

「始まるのか……」

「ほら！アンタも行きなさい！！」

「えっ！？」

美琴に蹴られ、上条は船上から一気にダイブすることになった。

「うう…不幸だ…まあ、エース助けるためだから仕方ない…か…」

思いつきりぶつけた尻をさすると走り出す上条…だったが……

「アレは…確か”鷹の目”!？」

以前、麦わらの一味の剣士・ゾロでも歯が立たなかった最強の剣士…鷹の目って呼ばれていた奴が立っていた。

そつえばアイツも七武海だった…と頭の片隅で上条が考えていると……

「押し量るだけだ……あの男と我々の本当の距離を…」

と言って鷹の目は黒い大刀を振り下ろしたのだ!!

ドオン!!

刀の放った斬撃が氷の海を割りながら白ひげに向かって飛んできた。いや…彼自身は白ひげに放ったのかもしれないが……その斬撃の直線状には白ひげの他に……

「不幸だ！！！！」

上条もいたりした。彼の右手にはすべての能力を無効化する力……
イマジンブレイカー
幻想殺しが宿っているが、それは”能力”に効くのであって、”斬撃”には効果がない。

走馬灯が上条の脳裏を駆け巡り、上条は目をつぶった……

……が、一向に何も起きない……

「大丈夫か、トウマ？」

恐る恐る目を開けるとそこにいたのは……

「たしか……3番隊隊長のジョズさん！？」

「……覚えていたか……？」

「なんで……アイツの斬撃は”世界一の斬撃”だったはず……って」

その時、上条はジョズの身体の一部が変化しているのを見て目を大きく見開いてしまった。

「だ…ダイヤモンド!？」

そつ……ジヨズの体の一部が世界一の強度を誇る宝石…ダイヤモンドに変化していたのだ!!

「ああ…俺の能力は体の一部をダイヤモンドにすることが出来る。」

「へ…へえ……なんかすげえな……って……親父い!!」

ジヨズの顔を見上げた時、さつき美琴と戦った(?)黄猿という男が白ひげに攻撃するのが見えた。

やさかにのまがたま
「八尺瓊勾玉」

親指と人差し指で作った輪から、無数の光の弾丸を発射する黄猿。先程の技とは違うが、美琴の超電磁砲とほぼ同等の威力を持つ技をつかう奴だ……

「心配するな…親父の所にはマルコがいる。」

「マルコって特徴的なしゃべり方とパイナップル頭の？」

本当に強いのか？」

上条がマルコに抱いた正直な感想は”あまり強くなさそう”だった。少なくとも、このジヨズという大男の方が強そうに見える。

「いや…マルコは強い…ほら、見てみる。」

見てみると、青い炎をまとった男が攻撃を全て受け止めている。

「いきなり”キング”は取れねエだろうよい」

「え…えっ！？なんか再生してる！！」

「そりゃそうだ。1番隊隊長のマルコは別名”不死鳥のマルコ”。世にも珍しい”動物系幻獣種^{ソオン}”の能力者で不死鳥の再生能力を持っている男だ。」

驚く上条に説明をするジヨズ。

確かに上条のしている目の前で青い鳥…おそらく不死鳥に変化して黄猿に一気に向かっていくマルコの姿が見えた。

「アイツは心配しなくていい…ところでトウマ。

お前はあの嬢ちゃんに蹴り飛ばされてここに落ちて来ていたが…
…船に戻るなら今のうちだぞ？」

「戻らねえよ。俺にはすることがあるんだ…っっていうても、ここからあそこまでは距離があるんだよな……」

それを言うとジヨズがニヤッと笑った。…正直怖い…

「なら一気に向こうまで進ませてやる。」

「はい？」

「つかまってるよ……！」

「う……うわああ……！！！」

上条の一気に視界が高くなった。上条は必死で氷塊にしがみついていた。

そう………ジヨズが凍った海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して何と投げ飛ばしたのだ。…上条ごと……。

「まあ……一気に進めるからいいけど………て……うわああ……！！！」

目の前から溶岩のようなモノが襲い掛かってきた。
アレを喰らったら………死ぬ……！！

上条は直感的に右腕を前に突き出した。

狙い中！

溶岩は能力によって生み出されたものだったので、”幻想殺し”で消し去ることが出来た………のは良かった。

「ふ……不幸だああ……！！！」

手を放したことでバランスを崩し、本日2回目の急降下ダイブをす

る上条。

とにかくこのまま落ちたら”死”確定だ。
慌てて自分を支えてくれるモノを手探りで探す。とはいっても……
今はダイブ中……そんな都合の良いものは……

ガシィ！

あつたりした。

「あゝ…助かったぜ……って…なんか暖かくて柔らかい気が……つて……」

掴んだモノの正体に気が付いたとき…上条の顔がこれ以上ないってくらい赤くなった。

あわててソレから離れる。

「あ…えっと！今のは事故って言うか…なんていうか…生命の危機を感じていたので…その…必死で…」

「ほう…わらわを前にして言い訳か？」

わらわの体に触れていいのはアノ方だけじゃ。」

静かな怒りをにじみだす絶世の美女……女ヶ島「アマゾン・リリ」の九蛇達による海賊団・九蛇海賊団船長であり王下七武海の紅一点で別名が”海賊女帝”…”ボア・ハンコック”が上条の前に立っていたのだった……。

第11話 美しく性格もいい女なんていない

「……あれは一体……？」

白ひげ海賊団12番隊隊長であり、大柄な隊長たちの中では珍しく常人程度の身長ハルタは、目の前で起こった出来事に目を思わず見開いていた。

同僚のジョズが持ち上げた凍った海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して、海軍が誇る巨人部隊の半数を潰したから……だけでは無い。

その氷塊が落ちてくるのを阻止しようと、海軍大将の赤犬が立ち上がり、右腕を溶岩に変化させるとそれを氷塊に放っていた……。まるでそれは同じく同僚で親友のエースが操る”火拳”のようなマグマの拳……。

このままでは、跡形もなく蒸発してしまい、そのまま火山弾として地面に落ちてくると思ったハルタは、隊員たちに避難を呼びかけようとした……。が、その溶岩が氷塊にぶつかる前に、跡形もなく消えたのだ。

……ジョズの能力は確か「肉体の一部を”ダイヤモンド”に変化させること」であって、相手の能力を無効化する力なんてない。というより、そんな”海楼石”みたいな効果を操る能力者なんて聞いた

こともない。

元々溶岩なんて放たれてなかったのか？でも……赤犬の能力で確かに溶岩が放たれていた。なのにそれが一瞬で影も形もなくなってしまった。

……こんなことってあるのだろうか……

「ボサっとするなって!!」

ズカーンっ と銃声と共に何かが頭の上を通りぬける。

ハルタが振り返ると、ドサッと海兵が銃弾を浴びて倒れるところだった。

考え事をしているうちに注意力が散漫になっていたようだ。気を引き締め剣を握り直すと、自分を助けてくれた人物を探した。

「サンキューな、イゾウ!!」

「全く……隙だらけだ。」

16番隊隊長で、歌舞伎の女形のような姿かたちをした男…イゾウがはぁ……っとため息をついた。
彼の持っている二丁拳銃のうち一つの拳銃からは、まだ銃弾を放った時の煙がうつすら立っていた。

「何か考え事でもしてたのか？」

「うん……そのさ、今ジョズが放り投げた氷塊あるだろ？あれを赤犬が……」

「あ……溶岩が一瞬で跡形もなく消えたって奴？

あっちこっちで海兵達も俺たちの仲間も驚いているぜ？いったい誰の仕業だろうかってな。」

「じゃあ……見間違いじゃなかったのか……

本当に誰の仕業だろう？ジョズの新しいダイヤモンド応用術か？」

「ダイヤモンド応用術！？」

ハルタのつぶやきを聞いたイゾウは笑い始めた。

「あれはトウマの技さ。」

「と……トウマの技だって！？」

あいつにそんな力があるのか！？」

ハルタは襲い掛かってきた海兵を切り捨てながらイゾウに問いかける。

トウマというのは異世界から”白ひげ海賊団”の浴室にトリップしてきた少年の事で、今回のエース救出に協力してくれると言った、これといって戦闘力がありそうには思えない少年だった。

「俺って目がいいだろ？だから氷塊の上にトウマがへばりついてるのが見えたんだよ。

で、赤犬の溶岩が迫ってつ来たときに、トウマが右手を前に出して溶岩を消したのさ。」

イゾウは襲い掛かってくる海兵達に向かって的確に打ち込みながら答えた。

二丁拳銃使いのイゾウは目がいい。だから彼が言うなら本当にトウマが消したのだろう。

まさか…あの少年にそんな力があつたなんて……

あの短髪少女の方が強いと思っていただけ、違つかもしれない。

「その事……海軍は気づいているのか？」

「どうだろうな……至近距離で見た赤犬は気が付いているかもな。だからセンゴクのところまで情報がいつている可能性は高い。」

「そうか……ん？」

「そういえばトウマの奴は今、どこにいるんだ？」

「……実は……」

イゾウの顔色が悪い。トウマになにかあつたのだろうか？

「あいつ……そのままバランス崩して落ちてさ………こともあるのに」
ハンコック
「海賊女帝」に抱きついたんだよ……。」

一発逆転の切り札になりそうな少年……トウマ……彼の寿命はここで終わったかもしれない、ハルタは思った。

「わ…悪かったって！そんなつもりじゃなかったんだって！！

つか、あのタイミングで溶岩が目の前に現れたのが悪いんだって！！

なんか…もう…不幸だー！！！！！！」

顔を赤らめながら、頭を抱え込む上条当麻。氷塊に襲い掛かる溶岩を、右手に宿る力……”イマジンプレーカー幻想殺し”で消したのはいいのだが、そのせいでバランスを崩し氷塊から落ちて………あわてて、支えとして抱きついたモノはなんと、絶世の美女だったのだ。

「ん？っていうか、なんでこんなところにアンタみたいな人がいるんだ？

御坂がいうには一般人はみんな、なんたら諸島に避難しているって聞いたんだけどな……まさか、逃げ遅れたのか！？」

……上条は目の前にいる美女…ハンコックが”海賊女帝”と恐れられる”七武海”だとは知らない。彼の主な原作知識はアラバスタどまりで、それ以降は穴だらけだからだ。

”麦わらの一味がバラバラにされた”という事実は知っているが、誰の仕業かは知らないし、その後、彼らがどこへ飛ばされどんな運命を辿ったのか知らない。

だから、目の前にいる美女は”逃げ遅れた一般人”として認識していたのだ。

「ほう…主はわらわが一般人に見えるか？」

「えっ！い…一般人じゃないのか？」

「……なんと…わらわのことを、この戦場で知らぬものがいたとは……」

まあよい…特別に教えてやろう……」

美女は相手を見下し指さしながら後ろにのけぞるポーズをとった。
それは、あまりにも見下しすぎていて、逆に見上げていた。

「わらわは”王下七武海”の1人、”ボア・ハンコック”。
その名をよく心に刻んだまま……その心にある邪心にやられるが良
い……」

両手の指でハートマークを作るハンコック。

嫌な予感がした上条は、ハンコックの美しさに顔を赤らめたまま一歩後ずさりした。

「な…なにをする気だよ！？」

「メロメロ甘風……！」

ハートマークのようなピンク色の光線が上条を襲った

……が……

「「？」」

何も起こらない。

「おい……あの少年……」海賊女帝”の技が効かなかったぞ？」

「邪心が無いようには見えないが……」

「まあいい……もし、本当に”女帝”の技が効かぬようなら、俺たちであの少年を倒せばいいからな。」

遠巻きに2人を見ていた3人の海兵が口々に憶測をかわす。

「あゝ……たぶんだけど……俺の右手がその能力を消したんだと思う……」

「能力を消す能力じゃと？そんな”海楼石”のような効果があるわけなかるう！！」

”メロメロ甘風”^{メロウ}！！！！」

「つつぶねえ！！！！」

上条は避けたが、そのせいで後ろにいた3人の海兵が”奇妙”としか形容できない形で石像になってしまった。

「なぜ、わらわの攻撃を避けるのじゃ!？」

「いや…だって…避けないと不味いし…万が一、右手以外に当たったら不味いし…」

「つか、こいつら…海兵だよな? お前って…」

スレイフアロー
「” 虜の矢 ” ! ! ! !」

投げキスで作った巨大なハートマークを弓のようにして破裂させ、大量の矢を上条に向けて放った。

避けることが不可能だと感じた上条は右手を使い、自分に矢が当たるのを防いだのだが……

彼らの戦いを見ていなかった海兵達や海賊たちが矢に当たり、一気に石に変化してしまった。

「なぜじゃ! ? なぜわらわの技が効かんのじゃ? ……こんなこと…あなたの方以来じゃ…」

「待て待て!! ……なんで話の途中で攻撃してきたんだよ! ?」

「…知れたことを…わらわはなにをしようとも許される……」

「なぜならば……美しいから!!」

「……………」

呆れて言葉が返せない上条だった。

「いや…確かにあなたは美人だけど……人間していいことと悪いこ

とがあるだろ？

つてか、海賊はアンタの敵だから何も言わねえけど、一応、お前は海軍側の人間だろ？

なんで海兵にまで攻撃すんだよ！？」

「ふん……」白ひげ」と戦うことまでは承諾したが……わらわは仲間になるとは言っておらぬ。

男など皆同じじゃ……あの方以外は……」

「……あの方？（だれだそれ？）

でもよお……それでも協力している以上さ、”仲間”っていうんじゃないのか？」

「言つたはずじゃ……わらわは何をしようとも、美しいから許されるのじゃ。

男などどうなっても構わぬ。むしろ石になった方が邪魔なのが消えて、清々する。」

そついうと、最初に石になった3人の海兵のうちの1人を足蹴りで粉々にした。

それを見たとき、上条の中で何かがキレた。

「お前さ……男にだって命つてもんがあるんだぞ！？」

「何度も言わせるでない。わらわは……」

「命ある者は皆平等なんだ！どうなっても構わない命なんて……そんなの無いんだよ……」

例えそれが人工的に生み出されたものであっても……

『”人間がいる”と思わせる』物理的情報の集合体のようなものであっても……

奴隷だったとしても……

生きている限り…そこにいて笑ったり話したり悲しんだりできる限り……命ある者なんだ！！

簡単に消えてはいけない大切なものなんだよ！！

消えたら悲しむ人がきつとどこかにいるものなんだよ！！

だから……それを簡単に”どうなっても構わない”なんて言うんじやねえ！！！！”

ハンコックの動きが止まった。

そして…その美しい顔が一瞬、歪んだように上条には見えた……が、次の瞬間には元の凍てつくような顔に戻っていた。

「ぬしは…わらわが”男”という下等生物をなぜ嫌うか知らないくせに、勝手なことを言うのではない！！

わらわは何をやっても許されるのじゃ……美しいから！！！！

パフューム・フェムル

”芳香脚”！！！！”

ハンコックは休む間もなく蹴りを連発していく。そのけりが当たった個所はすべて石と化し、崩れて行った。

最初は避けようとしていた上条だったが……

パシィ

「！？」

右手でなんとかハンコックの足をつかんだ。
その瞬間、ハンコックは、まるで海楼石に触れたかのように足に力が入らなくなってしまった。

「お前がなんでそこまで」男」が嫌いになったのか俺は知らない。
でもさ、相当、嫌なことがあったんだろってことは想像つくぜ？」

「……………」

「その…なんだ？信じてもらえないと思うけど、俺はココとは違う
異世界から来たんだよ。」

で…もしさ、俺がエースを救い出しても帰る術が見つからなかった
ら……

お前が抱いているその幻想をぶち壊してやる！！！！
そのお前の中にある最悪な出来事を消して、救い出してやる！！
…”男”ってそこまで悪いモノじゃないぜ？」

…ハンコックは黙ったままだった…

そして…彼女が口を開こうとしたとき！！

「エースくん！！！！」

今そこへ行くぞオオオ！！！！」

野太い声が湾内に響き渡った。

見ると、巨人族の二倍以上はある巨体を持つ…編み笠をかぶった人間(?)…白ひげ傘下の海賊・リトルオーズJr.が海軍の船を持ち上げているところだった。

「やべえ!!あの太男が船を持ち上げた時には市街地に入って”赤犬”とかいうオッサンかスクアードとかいうオッサンを探さねえと行けねえんだった!!」

慌ててハンコックの足を放す上条。

「待て。主…名をなんという?」

走り去っていかうとする上条の背中に声をかけるハンコック。
上条は振り返った。

「俺?俺は上条当麻!!って…うわぁ!!」

流れ弾をスレスレノところで避ける上条。そのまま慌てて走り去ってしまった。

「……カミジヨウ・トウマ…か…」

ハンコックの脳裏に、彼女の愛しの人…麦わら帽子をかぶった少年が浮かんできた。

彼も…”奴隷”を…”生きている人間”だとみなしてくれた。

ハンコックは自分の背にある…一生消えない刻印を服の上から触った。

「…異世界から来た”男”…か…」

何もハンコックのことを知らないのに…敵なのに…”幻想をぶち壊す”だの”救い出してやる”だの…

……不思議な奴だ。

人の価値観なんて…そう簡単に変わるわけがないのに…

……ハンコックはもう一度、上条に会ってみたかったりしなくなってきた。

「オーズに気を取られていると、攻め落としちまうぞ…！」

下の方から男の声が聞こえた。

ハンコックは黙って唇に手を当てると、投げキッスを作り出した。

「「スレイファロー
” 虜の矢” ! ! !」

たちまち男たちが石になっていく。

ハンコックは考えるのを止めて、戦場に向き直った。
いずれ来るかもしれない、最愛のあの方……死刑囚・エースの弟……
ルフィを待つために……

第12話　しばらく会ってないと顔って変わってたりする

「はぁ…はぁ……」

マリンフォード市街地を走り抜ける1人の海兵の姿があった。

…ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ…中將だって全員集まっている…

俺は…安全だ。…絶対に…生き残ってやる！

…そう心に誓ったはずだったのに…その決心が揺らいでしまった。

いや…正確に言えば音を立てて崩れてしまった。

中將達があんなにそろっているのに、有利に戦を進めていない。巨人より大きい人間が…あんなにあっさりと湾内に侵入していた。海軍が誇る巨人部隊だって…さっきの氷塊で半分がつぶれてしまっていた。

そもそも海軍の実力者…3人の大將たちだって、そこまで活躍しているわけではない。

そりゃ…青キジ大將は津波を凍らせたが…海まで凍らせたので足場をつくられてしまった。

黄猿大將だって、あの短髪の小娘が放った光線を相殺させていたが…あの不死鳥になれる能力者に海面へ蹴り落とされていた。

赤犬大將だって…確かに、あの氷塊を消そうと溶岩を出した…

…のに、氷塊に当たった瞬間に溶岩が跡形もなく消えてしまった。……否。正確に言えば……氷塊の上にへばりついていた少年の右手が身体の何倍もある溶岩を消していた。

それは……見間違いではないはずだ。

だって……自分は”視力”を買われ海軍へ入隊できたのだ。

見間違えるわけがない。

改めてそう思うとゾクウツと体に電気が走ったかのように震えた。

黄猿同等の光線を放つ少女……巨大津波をいつでも起こせる”白ひげ”……どんな攻撃を受けても再生する不死鳥……あんな巨大な氷塊を楽々持ち上げる男……それに……まるで海楼石のような能力を持った少年……

「勝ち目が……あるわけない!!」

「どこへ行く気じゃ？」

びくうっとして立ち止ると……そこにいたのは……

軍帽と薔薇を胸にさした赤いスーツ……海軍大将・赤犬がそこに立っていた。

「早く戦場にもどれ!!!」

「はあ……はあ……」

まさか…ここで出会うなんて…海兵は走ったせいで荒い息をしながら赤犬を見た。

誠心こめて言えば…伝わるかもしれない……

「…み…見逃してください…！！！」

死ぬことが怖くなった。家族を思うと…

足がすくむんです……！！…どうか……」

「本当に家族を思うちよるんなら…

”生き恥”をさらすな……！！！」

見る見るうちに身体が溶岩へと変化していく赤犬…

ああ…俺の人生終わった………つと海兵が思った瞬間だった。

「てめえ！！待ちやがれ！！」

「き…君は…！？」

「…誰じゃ？」

はあ…はあ…つと膝に手をつき息を整えていたのは…つんつん頭の

少年……

たしか……

「君は…あの氷塊の上にいた…？」

「あつ…お前見てたのか？」

つてことより……お前！今さ、何しようとしたんだよ！！！」

キリットした目で赤犬をにらむ少年……なんで海賊の少年が俺を助けようとするんだ？
海兵には理解できなかった…

「…何をしようとしたか…じゃと？
それは………こうしようとしたんじゃけん！…！」

赤犬は溶岩に変化した腕を振り下ろした。

目の前に現れた少年は…先程、氷塊の上にへばりついていた少年だったはずだ。

よく覚えている…確か少年の右手が自分の溶岩を消したのだ……飛ばしたのではない。初めからなかったかのように消えたのだ。

…このことはまだ上に報告していない。
本当に彼の右手が消したのか？海楼石のようなものを仕込んでおいたのか？それとも…あの氷塊自体に細工を施しておいたのか…
不確定なことが多すぎるからだ。下手な情報を流して混乱させては

元も子もない。

……これから大事な作戦を控えているからというのもあるが……

どちらにしろ……ここで少年を潰す。潰せなかったら……その時考えればいい。

「やられるかよー!!」

少年が右手を前に出すと……やはり溶岩が跡形もなく消えた。

「な……んで……」

少年の後ろにいる腰抜け海兵がオドオドと尋ねていた。

「決まってるだろ！見捨てられるか！

ってかオッサン……！なんで仲間に攻撃すんだよ！見てたけどよお……

こいつはもうとつくに戦意がなかったのにさ……

なんで”生き恥”って発想になるんだ？

死んで家族を悲しませるより……生きて帰って笑いあった方が幸せじゃねえか……!!」

「……海兵が”悪”^{かいぞく}に背を向けるなど言語道断じゃからじゃけん。」

笑わせるガキだ……と赤犬は思った。

何故、海賊が海兵を助けるのだ？それ以前に海賊が正義面している

ことに腹が立った。

正義は海軍。悪は海賊なのだ。

それよりも……あのガキは、やっぱり右手で攻撃を無効にしていた。左手の方が出しやすい状態だったのに……やはりあの右手に何か隠されているのだろう。

さつさと始末した方がいいかもしれない。

「に……逃げる!!」

アレは海軍・大将の”赤犬”様だぞ!!」

「へえ……アレが美琴が言っていた……で、あんたは海兵……なんだよな?」

「は……はい……」

「あー……不幸だ。

スクアードって奴じゃなかったのか……」

「おしゃべりは……そこまでじゃ。」

再び身体を溶岩にする赤犬。

そして次は……右手だけじゃ抑えきれないくらいの大きさの溶岩を作り上げる。

「まだ……能力は……右手だけじゃないんだぜ!!」

ずっと握っていた左手を高く上げる少年。一瞬だけ赤犬の動きが止

まった。

それを見逃す少年ではなかった。

「とりゃー!!」

ボワン!!!

少年が左手に持っていた丸い球が霧散し、辺りに煙が立ち込めた。

「煙幕…」

煙幕が収まったときには、あたりに誰もいなかった。

「サカズキ大将。作戦の準備が整いました!!」

電伝虫から声が聞こえる。

「分かった…それからセンゴクに伝えるんじゃ…」

”海楼石”に似た能力を右手に宿す少年が海賊にいるとな……」

「あゝ死ぬかと思った……」

ぐてえゝゝつとその場に横になる上条。

「御坂の奴がしっかり考えておいてくれたおかげで本当によかったぜ……」

戦争の前、美琴がイゾウから「女の子が戦っちゃ不味いだろ。言ってもいかないと思うけど……まあ……万が一のためにコレを渡して置くぜ」つと言われ渡された”ワノ国特製煙玉”……。

「どうせアンタにはガチンコ勝負は出来ないでしょ？ さっさと隙を見つけてコレを使って逃げなさいよ！」
つと言つて煙玉を譲り受けたのだった。

「にしても、アンタもありがとな。」

「い……いえ……だって……なんとなく……このまま死なせられないって思いましたから。」

ピンクの髪にバンダナにメガネを額にかけた少年が弱弱しく笑った。

煙玉に紛れて、海兵と一緒に横道に入った時に、この少年が
『こっちです！！』

つと言つて安全そうな場所まで連れてきてくれたのだった。

「まったく…海賊がなんで海兵を助けたんだ！？」

ピンクの少年の友人なのか…一緒についてきていた金髪の少年が呆れた感じで声を上げた。

「だってよお…フツー助けねえか？」

「そうか？…まあ…そういうものか？」

「それより、いやぁ…助かった……ん？その声…どっかで聞いたことがある気が…」

名前…なんていうんだ？」

「ぼ…僕はコビーと言います。海軍曹長です。」

「俺は海軍軍曹・ヘルメツポだ。」

「コビーに…ヘルメツポ……って…」

ええ！？あの贅肉たるんだるん少年とモーガンの七光りのバカ息子
！！」

物語超序盤で登場した弱気な少年と、ゾロを処刑しようとした七光りを振りかざす少年が……目の前にいるなんて…

「えっ…昔の僕たちを知っているんですか？」

「うう……その……まあいろいろとあつてな。」

2人から目をそらす上条。…そして目をそらすとそこには、うずくまっで震えるさっきの海兵がいた。

「なんで…俺を……海賊のアンタが……」

「あゝ…俺って海賊じゃないんだよ。なんつーの？一般人なんだけどエースを助けに来たって感じか？

それにさ、人を助けるのに理由っているか？

俺はあの赤犬とかいうオッサンの正義に共感できなかったから助けただけだつて。」

「……………」

「義のために死ぬよりさ、しっかり生きて帰って家族と笑う方がいいに決まってるだろ？」

「…あ……ありが……とう!!」

海兵はオウンオウンと泣き始めた。

しかし…これから、どうしたらいいのか…

美琴から言われた作戦は、『スクアードが白ひげを刺すのを止めさせる』こと。

そのために『スクアードが赤犬の言葉に騙されている途中で乱入し、煙玉を使ってスクアードと一緒にその場を離れる。そして、安全そうな場所で説得を試みる』…ということ。

だが、もう頼みの綱の煙玉は使ってしまった。

今からもう一度、赤犬とスクアード探しをしても構わないが、逃げ切れる自信は0%だ。

ぶっちゃけ、あの怖面男ともう一度、ご対面したくない。

「き…聞いた！？ヘルメツポさん…今の作戦！？」

上条が考え事をしている間に、コビーが何か作戦を無線か何かで聞いたらしい。

「ああ。」

「一体どうしたんだ！？」

上条が尋ねると、一瞬、言おうか言わまいか戸惑う顔を見せていたが、言うことに決めたようだ。

コビーは半分、震えていた。

「エースさんの処刑を予定を無視して執行するって…!!」

「はあ！？そ…そんなことしたら……」

そんなことしたら…”白ひげ”が黙っていない…はず…何を考えているんだ？

「ん…あれって…」
「何か降って来るぞ？」

海兵はいまだに泣いているので動かなかったが、上条・コビー・ヘルメツポは上を向いた。

なにかが…落ちてくる……

「だから おめーはやりすぎだっただよー!!」
「コイツのまばたきのせいだ」
「ヴァターシのせいにする気!!? クロコオ!!」
「どーでもいいけどコレ死ぬぞ!! 下は氷はっただぞ!!」
「!!」

その声は他の海賊・海兵達にも聞こえたらしい。

戦う手を止めて上を見上げる者が増える。
処刑台の上のエースも上を見上げ…ラストオーダー打ち止めも満面の笑みで上を見上げる。

「来た! ようやく来たよ!! ってミサカはミサカは喜びを全身で表してみたかったりするんだけど、手に重い手錠が付いていて表せなかったり!!」
「来たって…誰が…?」

エースは言葉を失った。…落ちてくるものの正体に気が付いたからだ。

「ああああああ……」

あ！おれゴムだから大丈夫だ！！！」

「貴様一人で助かる気力ネ！！！ 何とかするガネ！！！」

「てめエの提案なんて聞くんじゃないやなかつたぜ

麦わらア！！ 畜生オ！！！」

「こんな死に方 ヤダッチャブル！！！」

誰か止めて~~~~~ンナ！！！」

「っち…うるせエなア……」

「安心して下さい！！落ちるのは海のはずです……と、ミサカはミサカが抱いている落下の恐怖を我慢して、皆さんを安心させようと叫びます！！！」

そう…落下してきたのはインペルダウン脱走組。

「ルフィ…と一方通行に御坂妹！？」
アクセラレータ

あっ…クロコダイルに…バギーに…だれだあの顔でか！？」

原作を知らない上条は驚愕の声をあらわにした…

今後…戦況がどうなるか分からない……
でも……これが何かしらの転機になる……そうどこかで感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727x/>

とある魔術の頂上戦争

2011年11月4日02時04分発行